

趣  
味  
談  
採  
餘

## 一 含蓄の趣味

含蓄は趣味の大要件である。そこで含蓄は何かと云ふと、餘情のあることを云ふのである。俗に所謂奥床しいなど云ふ事である。有りつ丈を現はさず、幾分を想像や推測に任すことを云ふのである。全體想像は無限であるから、想像で味ふ方が深く深く感興を起すものである。餘り物がハッキリ現はれ過ぎて居ると想像の餘地がないから、いくらい物でも直ちに飽きが来る。ツマリ趣味の區域が限られるからである。

含蓄は何にでもある、人の言語、文章、詩歌、俳句は勿論、繪畫其他の藝術品にもあつて、人をして趣味を感じしむる大源泉となつて居る。今一二の例を舉げて云へば、名高い話であるが、ある人十七字の俳句に近江八景を詠ぜよと難題を出したとき、さる俳客言下に「七景は霧にかくれて三井の鐘」の一句をうなり出して、いたく喝采を博したと云ふ事である。句の可否は且らく措き、此句は含蓄を説明するの好的例である。八首の俳句で一々八景をあらはしたりも、此一句が却つて面白く思はるゝのは、全く含蓄があつて讀者をして無限の想像を擅ま、

にせしむるからである。詩などに於ても同様で、沙翁シヤウソウの作の超絶して居る所以は、同一の詩句が讀者の頭次第で何うにでも考へらるゝ様に書いてある所が妙だ。畢竟沙翁の詩に含蓄があるからである。總て名人の文章はいくら簡潔に書いてあつても言外にいろ／＼の意味があつて、大篇を讀んだ様な味を覺えるものであるが、拙な文章はいくら繊細に長く書いてあつても湯を呑む様で味が無い。結局は含蓄の有無によるのである。

人の談話なども、餘りにハッキリした話よりもボンヤリした話の方が却つて面白く思はるゝ、場合がある。又場合により、無言の方が喋々饒舌を弄するよりも味のあることもある。此場合に於ては無言は即ち能辯であるが、矢張り含蓄があるからの事だ。古語に大人は愚なるが如しなど云ふも、皆含蓄のある事を云ふに外ならぬ。又風景などに就て云ふも、朝夕のボンヤリした景物は、日中太陽の赫耀して細微のものまでハッキリ暴露するのに較べて何人も趣を感じる。別して詩人雅客は朝夕の景を賞玩して、之を詩題とし又畫題とする。要は朝夕の景は餘情があるからである。

繪畫などに含蓄を要するは誰も知る所である。例へば花を畫き、それに蝶を配するよりも、

蝶のみを畫き、暗に花あることを諷する方が確かに趣味を感じる。此點になると、日本畫の方が西洋畫に較べて概して含蓄が深い様だ。大體西洋畫は寫實を專として居るから含蓄が無い。例へば人物を畫くにしても、必ず寫實的の背景を添へ、影を添へ、満紙塗料を施さなければ已まぬと云ふ遣り口であるが、日本では背景も影も添へず、唯だ人物のみ畫き、全紙餘白を存する様な書き口が多くある。半可通の洋畫家はこれを見て、不自然だの、ワケのわからぬ畫だなどと云ふが、實は日本の書き口の方に無量の含蓄があるのである。餘白の中に背景も影もあるので、すべてを觀者の想像に委するのであるから、却つて無限の趣味が感ぜらるゝ。西洋では舟を書けば必ず水を畫き、其色や波紋までも書かぬと承知しないと云ふ風があるが、南畫などには、舟があれば水があるに相違ないと云ふので、寧ろ筆を省き、觀者の想像に委する書振である。どちらかと云ふと、含蓄の趣味は支那畫や日本畫に多く存して居ると云はざるを得ない。

他の藝術品、例へば彫刻、陶器などに於ても同様の譯で、餘り遣り過ぎたものは味が無い。一寸見て感興を惹き起しても直ぐにいやになるのは、全く含蓄がないからだ。名匠の作は餘り

手がこんで居らぬ。却つてザングリとして手の省けたものが多いが、どことなく云ふに云はれぬ味があつて、幾度見ても飽きが來ない。寧ろ久しくたつて見れば見る程趣を覺えるのも、矢張り含蓄の力が餘程手傳つて居るのである。

撰又宗教となると、神話でも佛像でも含蓄は尤も深い。全體理を以つて判ず可からざる不可思議と云ふことは、全く想像で味ふものであるから、趣味は無限と云うて宜しい。神話など云ふものは馬鹿けた怪談の様なものであるが、實はなかく興味のあるもので、何處の歴史も、上代となると、此神話が必らず味をつけて居る。佛像などでも、祕佛となると、見ることが出來ぬだけそれだけ趣味を感じる。皆な想像の餘地が甚だ廣く含蓄が深いからである。

要するに含蓄は趣味の必要條件とは云はぬ、これがなければ没趣味だとは云はぬ、併し疑ひもなく趣味の大切な條件である。

## 二 聯想の趣味

既に含蓄の趣味を云ふからには、聯想の趣味にも言ひ及ばねばならぬ。聯想と云ふのは英語

に「アソシエーション」と同じ意義で、或る事或る物に就き、それに關係あること共をいろいろ思ひ寄せて、數珠じゆの如くに繋ぎ合はせることである。例へば器物などで云へば、其產地、其作者、其傳來は言ふに及ばず、産地に就ては、唯だ其地名丈でなく、其地が昔し誰れの領分であつたとか、それが風景美に富んだ所だとか、古戦場であつたとか、或は著名な人の生誕した所だとかいふことまでも思ひ寄せるのである。作者に就ても、唯だ某といふ姓名丈でなく、其人の系圖やら、經歷やら、逸事やら、性格までも思ひ寄せるのみならず、其友人やら、他の同時の人迄も思ひ寄せるのである。其傳來に就ては、いつ作られ、それが何人の手に渡り、或は禁廷の有となり、或は國寶に指定されたなどの歴史を辿るは勿論、種々それからんだ瑣事にまで及ぶのである。聯想の及ぶ區域は、必らずしも其物に就ての經路をのみ辿るのでなく、或は他の類似のもの迄に及び、或は全然異なるものにも及び、種々の枝葉に涉り、其枝葉に又枝葉を生じて、頗る複雑錯綜の傍徑に入るものであるから、含蓄の區域が無限であるかの様に、聯想の區域も亦頗る廣いものである。聯想を馳せる人の知識が深く廣ければ、それだけ聯想の區域も廣くなるのであることは含蓄の場合と同じ事である。そして聯想により其物の趣味が益々

深くなつてくる。物に依つては聯想のお蔭で無趣味のものが趣味のものとなるものが少くない。聯想は物を美化するものである。茶人などが物を鑑賞するのは多くは聯想から來てゐる。若し聯想の働きが無ければ、物の趣味は半減するであらう。或は七八分を減するであらう。西洋の哲學家の内には、「アソシエーション」を以つて美の源であるとさへ説いた人もある。美の源が聯想だけでないにしても、美を誘起するに大なる幫助を爲すことは否み得ない。

物には何人が見ても直覺に成る程と趣味を感じるものもあるが、聯想を藉らざれば趣味を覺えないものもある。金銀を鑲めた精巧の製作物は俗眼でも美に感ずるが、哲人や鍛錬を経た鑑賞家でなければ、趣味を感じ得ないものが少なくない。諺に盲目千人といふは、よく云うたもので、多くの器物に對し、世俗は大概盲目である。それは鑑賞の力が無いからである。そして鑑賞には聯想が大切な働きを爲すのであるが、相當の能力が無ければ聯想が起らぬ。縱令聯想が動いても、それは頗る微弱で、廣く及ぶことが出来ない。茲に海中から取り上げた、青磁の茶碗がある。それは海水にさらされて光澤が全く無くなつてゐる。底には貝殻が附着してゐる。一見何の趣味も感じないものを、鑑賞家に取り上げて之れを珍とするのは何故かといふに、其

の器は四五百年前、支那、朝鮮で作つた名器の名残りであるといふ外に、奇しき傳來があるからである。昔し堺さかいの港の繁榮時代に、茶道が盛んであつて、豪奢を競ふ鉅公富商達は競うて名器を外國に求めた。それを舶載して歸る途中、船が難破して、名器は皆な海底に沈んだ。今漁夫に往々撈獲せらるゝのは其の器で、私の例に取つた青磁の茶碗も亦其一である。そして此の不幸なる經歷が此の器物に一種の趣味を與へるのである。鑑賞家は、當時堺の港が如何に繁榮であつたかを思ひ、如何に海路が危険で交通が不便であつたかを思ひ、如何に船の難破は待ち焦れてゐた人々を失望させたかを思ひ、其の失望者の内に某藩侯、某茶人のあつたことを思ひ、種々に聯想すれば、そこに無量の感慨も起るので、此器物に趣味も附け加はるのである。又こゝに粗製の小皿が十枚ある。時代は古いが、一向面白味を感じぬものである。それを茶人が取り揚げて、立派な箱に納めて「夜舟よふね」の銘を撰んで珍重したのは何故かといふに、昔し淀川よどがはを上下する通船は、深夜航行したもので、例の「クラワンカ船」が酒食を載せて、此の通船の客に供給した。其の食物を容れた器物が此の小皿である。或る好事の人が記念のため此皿を欲しがり、クラワンカの船主に譲つてくれと頼んでも頑固で應じないので、已むなく、幾回か



の往復に胡麻化して一枚づ、取り返つたのが十枚となつたのであることは、此の器の匣はこの蓋裏に書いてあるのでわかる。これなども「クラワンカ船」の當時を聯想してこそ、始めて趣味を覺えるものである。此の器物に對すると、クラワンカくわんかのだみ聲まで聞こえる心地するのは聯想の働であらねばならぬ。又黒田侯の所藏に係る、博多はかた文琳ぶんりんといふ茶入は、天下の名器と稱されてゐる。昔し豊太閤が、之れを所持した博多の豪商神屋宗湛かみや そうたんに割愛を通つた時、宗湛は此器だけは日本の國王の半分を以つてしても交換は御免を蒙ると刎ねつけた品だ。斯程のものであるから器物それ自身にも非凡の趣味もあらうが、實は其の來歴が大いに趣味を加へてゐるのである。此の器の來歴は、楊貴妃の舊藏であると云はれてゐる。神屋宗湛なる當時の外國貿易家が番頭を支那へ遣はしてゐる内に、其番頭失敗をしたので、主家に對し申譯がないと將に自刃に及ぼんとする時、其妾なる支那婦人が押し止め、妾が家の大切の名器、それは楊貴妃の愛玩のもので妾の片身を離さぬものながら、あなたの命には代へ難い、これを身代りに主公に獻せられなば多分罪は許さるゝであらうと、それを持たせて還した。さて歸朝後これを宗湛に見せると、宗湛は驚き喜んで、其器を戴かん許りに珍重し、失敗の事は深くも咎めなかつた

といふが此器の由來である。貴妃云々などは信すべきものでもないが、このロマンチックの來歴を聯想すると、器物に幾層の趣味が加はることは否み難い。天下の名物などいふものは、大概こんな來歴があるものである。茶人が來歴を貴び、箱書の筆者をやかましく云ひ、舊藏者に重きを置くのも、皆な聯想から來てゐるのである。

書畫などでも、聯想で趣味を加へることは勿論である。親しみのある人の手に成つた書畫に大抵趣味を感じる譯は、聯想がいろ／＼に起るからである。郷國を同じうする人の手に成つたのも矢張り聯想が起りやすい。識語のある書畫は識語から種々の聯想が起るし、獄中の詩とか絶命の詩歌なども、人が多く珍とするわけは、悲痛の聯想が起るからである。面白い經歷のある作家の書畫の珍とせらるゝのも、種々の聯想で趣味を添へるからである。或る一派の畫を見ると自然に同系の他の畫家の作を聯想し、門人の畫から其師の畫を聯想するなどは何人も實驗する所で、書畫の鑑賞には必らず聯想が伴ひ、そこに趣味も生ずるのである。

聯想が、全然異なるものにも及ぶ一例を云へば、秋の季節に郊外に策を曳き、程近き山を望むと、山腹に社寺などのある所の樹木が紅葉して際立つて面白く見える。公孫樹の葉は黄ば

み、楓樹の葉は血を吐いた様に紅に、深緑の常磐木がそれに交つてえも云はれない風致を覺える。併しこれは社寺の境内に限られた風致で、其の境内を離れては、杉などの森があつて境内を圍み、其の森が盡きると、茶褐色の雜木の林が山一杯を蔽うてゐる、杉の森や雜木の林は霜枯れて何の風趣もないのに、それに包まれた社寺境内の樹木が黄に紅に綠に錯綜した風致は、周圍とのコントラストで引立つて見えるのである。これに就て自然に聯想を起すことは、器物の包装である。貴重なる器物を包むには先づ錦欄や絹などを以つてし、その上包うへつひまには鬱金の裂き裂を以つてする、そして其の又上包は龜なる風呂敷を以つてする。これが普通に行はるゝ包装の方法であるが、此の樹木もそれによく似てゐる。社寺附近の樹木は錦欄や絹に比すべきで、それを取り巻く杉の森は鬱金木綿の様なもので、其の外側にある雜木林は宛がら粗末な布の風呂敷の如きものである。これは社寺を重器と見て、それを圍む樹木から包装を聯想した一例であるが、こんな風の聯想でも社寺に多少の趣味が添はるのである。

山嶽でも河海でも趣味を感ずるのは、多くは聯想の働きである。如何に平凡の山河でも、自分の踏破した他の山河、殊に外國の山河を聯想して比較などすると妙に趣味を感ずる。川中島

や平泉<sup>ひらひら</sup>などの古戰場は、唯だ見れば格別の趣もないが、其昔甲越の二雄が兵を交へたことや、三衛<sup>ひつゑ</sup>が京都に拮抗するほどの豪華を極めたことや、源九郎をかくまつたことなどを聯想すると、こゝに史的趣味を發する。そして史的回顧と云ふも、畢竟は聯想の働きである。古い宮殿や城址や由緒ある寺院などが、旅客に趣味を感じしむるのも、亦回顧的聯想によることは云ふまでもない。

### 三 煙草禮讚

近頃「煙草禮讚」と云ふ書物を書いた人がある。自分も煙草を好むから、それを讀んでかなり面白く感じたが、しかしこれは全部西洋の煙草の趣味を發揮したもので、煙草の種類やパイプの型まで言ひ盡してゐながら、全然日本の煙草に及んでゐない。誰か日本の煙草禮讚を書く人はないであらうか。

日本の煙草も元來は南蕃から渡來したと云ふので、日本固有のものではない。然し乍ら其煙草の種子が日本に培養されて、風土の關係から日本特有のものになつてゐる。丁度徳川氏の鎖

國時代に専ら世の中に行はれたと云ふ關係から、西洋各國の煙草は殆んど日本に輸入されず、永く固有のものを用ゐた爲、日本産の煙草は相當の發達もした。

又煙草に附屬する煙管、煙包たばこかの如きも、一種日本固有のものが、西洋に類例を見ないほど復雜に發達した。

### 煙草に關する文獻

日本で煙草に就ての書物は必ずしも尠くない。有名なものは大槻磐水の「蕙錄えんろく」と云ふ漢文に書いたもの、和文には「目ざまし草」と云ふのがある。又或る煙草屋が煙草の趣味を狂歌に詠じたものに「煙草百首」と云ふがある。その中には煙草の生産地、煙草の良否等を職業上から委しく書いてゐる。

今でも日本橋にある「村田」と云ふ煙管での老舗の昔の主人村田了阿は種々の著書もあり、相當な學者だつたが、村田と云ふ名稱の普く知られたのを利用して、他に一軒同じ商賣の村田と云ふ新店が出来た時、勿論品質は劣等で相手にならなかつたが、それを罵倒して斯う云ふ狂

歌を作つた。

やみ雲にむらたくと偽の家名はどこ誰にむらつた

偽りて村田をかさにきせる見世張おほせすばいいつらの皮

それから詩人の煙草を讚美した句に次のやうなものがある。

撥餘爐火耿將無。早有晨聲響睡壺。一摘草香含馥郁。數團雲影吐模糊。長頸烏喙君休惡。眞節鑿心我亦俱。于月于花相伴去。笑他秋扇籠須臾。

友人林若樹氏の藏する「たばこうりせりふ」と云ふものに、享保時代の江戸芝居をもちつて次の如き洒落文を書いたものもある。

もうすもおろかこのあきんど、江戸ぢうりつけの上々たばこ、十もんめでゆみや八文か  
けねなし、まづおつとつてはおとし玉、(中略)うらしま太郎がきせるつつ、ごく上たば  
このやんやすうり、らうにやくなんによのなぐさみぐさ、いのちをのぶるくすりとして、ち  
やうめいくさと申なり、さしてじまんにあらねども、われらがたばこひとひねり、女中に  
すわせ奉れば、いけうくんじて花もふり、しやかもだるまもうちやうてん、天ねんみめう

の御たばこ、てんと天下にかくれなき、天からふつたやすうりと、ぶてうほうけたうちた  
たき、テンテツトントツツテンテン、天もひびけとうやまつて、たばこ十奴で八文  
も一つ序でに某詩人の贊を挙げよう。

南方嘉種。惟草之珍。孕<sub>レ</sub>精育<sub>レ</sub>秀。懷<sub>レ</sub>英抱<sub>レ</sub>眞。茗羞<sub>レ</sub>其甜。麴讓<sub>レ</sub>其醇。春雨之夕。秋霜之晨。遠  
客千里。窮卷一身。鑽<sub>レ</sub>燧按<sub>レ</sub>管。社<sub>レ</sub>愁養<sub>レ</sub>神。金門公子。玉樓佳人。繡包徐啓。飛<sub>レ</sub>芳辭唇。家賞  
戶愛。美雅具陳。無<sub>レ</sub>貴無<sub>レ</sub>賤。形影相親。蘭佩薰纈。奚管靈均。丹心雖<sub>レ</sub>灰。風流長新。

## 煙草の異名

昔しから煙草の異名にはいろいろあるが、讚美の意をこめてゐるものが多い。例へば支那で  
「金絲煙」と云ふ如きは、烟のうつくしさをあらはしたものであらう。又「擔<sub>た</sub>不<sub>は</sub>歸<sub>こ</sub>」とも云  
ふ。これは貿易上盛んに賣れるものだから、持つて行つた煙草の荷を、持ち歸ることがないと  
云ふ意味で、「南靈草」と云ふのは其産地を表はしたものであらう。

煙草には色々なロマンスがある。ある帝王の娘が死んで之を葬らうとして死骸を墓へ送り、

一夜その儘にしたら蘇つた。何故かと云ふに、その墓地の近くに煙草の草があつて、其香氣を受けた爲に蘇生したのだと云ふ。この物語から「返魂煙」などといふ名もある。其他煙草の徳を古人は左の如く言ひあらはしてゐる。

酔つた者をよく醒めしめ、さめた者をよく酔はしめ、餓えたものを飽かしめ、飽いたものを餓えしむる。

斯様な言葉は殆んど他には移していひ得ない、煙草だけが全く自在の働らきをするといふが、事實その通りである。

如何に政府が禁じようとしても到底煙草を禁じ得ないのは、斯る靈妙不思議とも云ふべき非常な働きを以つて人の嗜好に投ずるからである。全體動物といふものは様々あるが、煙に就て嗜好を持つものは人類の外にない。或は之が高等動物の特權とも云ひ得るであらう。

前に擧げた詩人の句に、茶もその甘きを羞ぢ、酒もその醇を譲ると云つてゐるのは蓋し要を得たものである。如何となれば、酒はともすると廢し得るが、煙草は止めることが困難で、どうしても一旦煙草に興味を感じると、手離すことの出来ない程執着するのは、喫煙家の何人も



理解するところであらう。

### 日本煙草の特質

日本は海をめぐらした國で、氣候も中和を得てゐる。其關係から日本人は極めて淡泊なものを愛した。多くは魚類や野菜をとり、獸肉はあまり常食としなかつた。その國民性は、煙草の味にまで影響してゐる。外國のマニラ製の如き、或はエジプト製の如きは、孰れかと云へば肉食する濃厚な味に調和するものであつて、日本のおだやかな飲食物とは調和を缺くやうである。且つ日本煙草が、其淡泊な上に之を喫する方法も自ら西洋と異なる。必ず煙管の皿に少しばかり盛つて、これを斷續的に用ゐる。即ち分量の上に於て西洋とは自ら異なるところがあ

る。

斯様に淡泊性のものを少量づつ、吸ふのは日本人の身體に丁度適當する、まことに柔らかなみのある喫煙の仕方である。その結果、婦人の如きも或る年輩に至れば之を用ゐるが普通で、之を以つて別に悪いこと、されず、上流の婦人と雖も、之を用ゐて何人もとがめるものがない。こ

の特種な一種の喫し方に一改革を來して、明治以來西洋風になり、或は葉卷、或はシガレットを用ゐる結果、忽ち喫煙量が増加した。斯様な激變は恐らく世界の歴史にあるまいと思ふ。

### 煙草の附屬品

外國の影響を離れて日本で一種の發達をした事は獨り煙草ばかりでなく、煙管其他附屬品も亦さうである。

徳川時代の始めに煙草が日本に渡來した頃は、上流社會の贅澤品として取扱はれ、お客に對しては御馳走の一つとなつてゐた。その頃は、めい／＼が煙具を携帶することも尠なかつたので、煙草盆に煙草と煙管を添へて出した。それが段々一般に用ゐられるにつれ、從來の長い煙管では不便なので、追々に短かくなつて、且つ腰に挿んで置く必要から筒を要することになり、煙草入、緒締（そじめ）と必要なものが殖えると共に、其の形式も種々なるものが行はれ始めた。二つ折の煙草入れに扁平（のびがね）な延金の煙管を用ゐることが行はれた。これらは寧ろ西洋に近い形式であらう。但し、往々圖外れの大きなものを使用する向きもあつた。伊達者（だてしゃ）の持物、角力の關

取、或は俠客、若くはこれらに扮した俳優の用ゐたものは何れも圖外れに大きい。

煙具の意匠については、徳川時代の美術の粹を悉くとり入れて、精緻の極をつくした。金具の彫刻、袋地の爲に珍らしい裂地の創作、緒締の珍奇なるもの等、人々が其贅と奇とを競争することとなり、兎もすると腰の物一具に幾百圓幾千圓の價あるやうになつた。従つて煙管、煙包等を作る専門の店も出来、村田の煙管、竹屋の煙草入れ等定評のあるものが生れたわけで、曾ては佩刀の美を誇つたものが、後には煙具の美を競ふの觀を呈するに至つた。

尙ほ此他に煙具の種々の形式、それは煙草入や煙管のみで無く、煙草盆の種々の意匠、煙具を道樂に多く集めた人々の逸話、産地により煙草に特徴のある事、燧のさまざま、その袋、煙草屋の招牌、羅宇のすけかへ、委しく書けば興味のあることが少なくない。中にも喫煙の遊戯などは最も興のあることだ。昔しは花柳の巷に遊女などが煙を深く含んで、それをさまざまの形に吹き出して奇を衒つたものである。又煙占といふのがあつて、煙を環形に吹き出し、それを煙管で貫いて情客の來否を卜したこともある。遊女が口にした煙管を客に與へることなどは、接吻に近いと解してもよからう。

斯の如き、風俗に關係する日本固有のことも少なくない。又煙草を嗜む人と嫌ふ人と、高名の人物から調べて見るも一興であらう。意外の人が煙草を嗜んだり、嫌つたりしてゐる。一例を舉げると、新井白石は煙草を嫌つたらしく、朝鮮使節の來た時、應接の席上、盛んに喫煙する使節が白石に對して何故煙草を吞まぬと質したに對して、「錦繡の腸を汚ない煙でくすぶらすに忍びない」と答へたといふ話がある。彼れは偉い人物ではあつたが、煙草の味を解しなかつたことだけが玉に瑕だと、自分には思はれる。

尙ほ煙草に關する興味ある雜談は決して少なくない。何かの本に、今の英國皇帝が東宮に在らせられた時、旅中沙漠に通るか、つて喫煙を欲し、マッチを搜すと、只一本しか無かつた、その點火を誤ると絶體絶命であるので、東宮も血色をかへるまで緊張されたとあるが、こんなアネクドットは喫煙家の多く體驗してゐることで強ち珍らしくない。私にしても淺間山に登つた時に同じ様な事があつたが、それを絮説するにも及ぶまい。唯だ筆の序に録する一場の滑稽

談は、往年私が早稻田大學の前身東京専門學校の講堂で政談演説を試みんとして壇に登ると、警部が臨監してゐるので、早急の早替りで演題を改め、丁度其頃世界の煙草史を讀んでゐたから、その話をやつてお茶を濁し、警官を烟に捲いた滑稽談もある。こんな雜談までも取りこんで日本煙草の禮讚を書いて見たら相當に興味があらうと思ふが、自分はそれを爲すほどの暇をもたない。

## 四 紙

國の文野の度は紙の使用量で算するとさへいふ位に、紙は文化に大切な資料である。或る人の計算に、我が國民一人當りの紙の量は十七封度ゼツに當るといふが、英國の一人百五封度に較べれば甚しい相違があり、更らに米國の一人百二十五封度に較べれば、一層大なる距離がある。

紙の需要は文化が進むにつれてますます殖える。紙が多く使用され、ばされるだけ文化の進歩を封ける、即ち相互關係がある。然るに爰に妙なことには、文化の進むのと反比例に紙の質が退化して行く傾向のあることだ。先年各時代の各種の紙を集めて展覽會があつた折一覽した

が、現今の紙を以つて四五十年前のに比すると、何れも質の下つたのが目立ち、更らに百年前に較べると、一層粗悪であることが實證された。但しこれは日本紙に就て云ふのであるが、西洋紙に於ても、製法は追々進んで器用に紙は造られてゐるには相違ないが、其質に至つては矢張り下つてゐることは争はれぬ。

之は何故かと云ふと、昔は紙を貴重のものと考へ、之を濫りに使用することを惜んだ。且つ今のやうな進歩した印刷術もなかつたので、大量に紙を使用する必要もなかつた。曾ては良紙は貴族に限つて用ゐられた時代があつた。其貴族も紙を惜んで、反故裏ほんごらを用ゐて字を書いたものである。尙ほ紙の製造されなかつた上代に溯れば、獸皮を用ゐたり、竹や木葉を用ゐて字を書いたり彫つたりした時代すらあつたことを考へると、紙の惜まれたのも無理はない。然るに紙を使用することが盛んに行はれてゐる今日に於ては、新聞雜誌などの定期刊行物に使用さるゝ紙量だけでも大層なものである。かうなると、大量生産のために原料が變化せざるを得ない。現今では藁までも原料にする。木材ならどんなものでも好いと云ふので、幾百町歩の森林を伐り仆すと云ふ勢である。これは一面科學の進歩を示す譯で、濫獲ぼんぼくを材料にした舊時の紙

と、表面は格別の優劣がないやうにも見えるが、其實、質は劣つてゐるに相違ない。勿論特種の紙には特種の材料を用ゐるから例外はある。併し特種の紙は、普通大量に用ゐる紙に比すれば、其分量は甚だ僅かなものである。故に大勢からすると、紙は文化と逆比例に退化すると云ひ得るのである。別して日本の如く西洋と根本的に相違のある紙が、西洋紙に追々壓倒せられ、其の用途が減ずるに連れては、舊態の維持が出来ず、益々粗悪となつて僅かに残喘を保つてゐるのも是非もない次第である。

私は専ら趣味の上から日本の紙を観察して見たいと思ふのであるが、日本の紙は日本固有の特色があつて、どこの紙に較べても堅硬の資質を有してゐる。日本の如きヒキの強い紙は世界に無いと云へば大袈裟であるが、或る特種の紙こそ、西洋でも日本に譲らないヒキの強いものもあるが、日本ののは、普通の紙でも従前はヒキが強かつた。それは材料の然らしむる所で、薬紙などが出来て特色を損じたけれども、尙ほ今日でも此の特徴を幾許か維持してゐる。又美術的加工に就ても、決して西洋に後れを取らぬ。或る時代の或る種の紙に至つては、世界に冠たるものもある。それ等は追々後に説くとして、先づ日本の紙が如何に多種多様であるかを一瞥

せんか、言ふまでもなく日本に長く續いた封建の制下に、諸藩が思ひ／＼に紙の製造を獎勵した結果として、又當時交通が開けなかつた結果として、國が異なり地方が殊なれば、紙も亦異つて「ローカル・カラー」がそれ／＼に顯著で、いろ／＼の特徴があつた。全體世界の大勢からすると、交通が開けるに隨ひ、紙の種類が追々統一さるゝ傾向があり、複雑のものが段々單調となる趨勢もあるが、趣味の上から云ふと、多種多様で複雑であることが、未開の遺風であつても、興味は却つてそこに存するのである。

日本の紙の種類が多いのは、單に製産地が區々で製法が異つてゐる爲めばかりではない。用途により、それ相應の紙を要するからでもある。勿論此點は西洋でも同じことであるが、日本には前述の如く多種の紙があるからでもあらうが、如何にも用途により特別の紙が使用されてゐる。恐らく此點も他國に匹儔が無いかも知れない。そして其の用途相應に適當の紙があることも、亦紙の趣味上閉却してはならぬと思ふ。今特別の紙を要する用途を、思ひ出すまゝ、に書きつけて見ると、左の如くである。

傘 提 燈 扇 子 防水用 蠶卵紙



紙幣	障子紙	襖用	表裏裏打用	帳面用
表紙	辭令用	寫經用	包裝用	書籍用
錦繪用	書簡	廁用	凧	染物型紙
書畫用	儀式用			

尙ほ以上の外に伊勢で烟草入を作る一種の油紙がある。それは赤味を帯びて透明で、宛がら菓子羊羹の如くであるから羊羹と云うてゐるが、烟草の乾燥を防ぐ爲めに工夫されたものである。洋風の感化で出来た紙の類では、ナブキンに用ゐる紙もあれば、テープに用ゐるものもあり、尙ほ此外にもいろいろあらうが、右に擧げた丈でも用途は頗る多類であると云はねばならぬ。勿論用途の相違で紙種が凡べて異なるものでもないが、共通のものはいくらもないと思ふから、日本の紙の種類は如何にも多般であることがわかる。

斯く多種の紙を要する所以は、風俗習慣からも來てゐる。工藝上の必要からも來てゐる。今一々こゝにそれを説く暇もないが、兎に角其の單調でない處に趣味が存するのである。何もかも同種の紙が共通で間に合つたら便利は便利であらうが、そこには趣味は存せぬ。趣味の問題

と便利問題を混淆してはならぬ。

日本には上代から佳紙が製出されてゐる。經卷に用ゐた紙などは支那の麻紙を摸したものであらうが、其實は決して支那には譲らない。紺紙も寫經用として古くからあるし、香を漉きこんだ紙もある。全體日本では上代から貴族社會に和歌などの文學が行はれて筆道が盛んであつた結果、書く物としての紙が精製されねばならなかつた。そこで非常に良質の紙が早くから漉かれた。正倉院に保存されてゐる紙や、上代の歌切ウタギリなどで残つてゐる紙を見ても、驚かる、ほど精製の佳紙がある。上代の紙にはいろいろの種類もあるが、鳥の子が多く残つてゐる。此紙は今も官省の辭令書などに使用されてゐることは誰れも知る通りであるが、之れにも幾多の變遷があつて、今日の鳥の子は昔のに較べると甚しく劣つてゐる。これは其初め何處から製出したか、詳かに知らないが、栃木縣には鳥の子と云ふ地名があり、今でも紙の産地である處から考へると、此地が鳥の子紙を製した所ではあるまいか。又奥羽のやうな僻地から檀紙が出た。この紙は奉書紙ホウショウシに變まをよらせたもので、紙面が平滑でないが、そこに一種の趣味を持たせて、和歌を認める料などにされた。今も幾分か製造されてゐるが、昔のものには及ばない。

右のごとく原料の關係から立派な紙が田舎から製出され、朝廷へ貢されたことは古くからである。何と云つても佳紙の多く出たのは、文化の中心であつた京都並に其附近であつたことは云ふまでもない。加工の妙に至つては、勿論京都に及ぶものはなかつた。其一例として茲に紙に地模様を描く墨流しの法を擧げる。これは紙を造るに當り、原料を流し込んだ船に水を張る、其水の上に彩色を以つて種々の繪の具を浮かせ書きをして、船の下の栓を抜くと水は流出して、水上の繪の具がソツクリ紙に附着する。これが墨流しの法で、一種云ふ可からざる趣のある地模様を現はすものである。斯る工程より生ずるものだから、同じものを二つ作り出すことが出来ない。そしてそこにも亦趣致が存するのである。此法は色紙、短冊などに施されたことは勿論だが、大部の寫本も此墨流しの紙を用ゐて出來てゐる。西洋でも字書の小口などに五色の模様を施すに此法に依つてゐるやうだが、其精美に至つては日本が遙かに其上にあることは争ひ難い。

此の墨流しの紙の、大規模に今日存してゐるのは、藤原時代の名人が手を別けて書いたので有名な本願寺の寶物「三十六人集」などであらう。其の冊數は記憶しないが、三十六家の歌集

がそれ／＼冊を異にしてゐるから、なか／＼浩漣なものである。その用紙は鳥の子で、一枚一枚違つた意匠で墨流しの法により加工され、技巧の極を盡したものである。山水花鳥あらゆる模様があることは勿論だが、人の眼に錯覺を生ぜしむるやうな妙技を凝らしてゐる。例へば紙の一隅に十枚位折れてゐるやうに五色の断面を見せたり、或は綴目とどめの處へ小刀で何十枚か切り裂いたかの如く断面を見せた所などもあつて、うっかり見ると事實折れたり切られたりしてあるかの如くに出来てゐて、眼が翻弄されるのに驚く。言ふまでもなく、此等の用紙には墨流しの外に金銀泥で種々優雅の圖が書かれてゐて、如何にも華麗のものである。何百枚といふ數多き紙が毎紙地模様を異にしてゐるなどは、眞に驚歎に値する。そしてこれが古く平安朝のものがあることを考へると、佳紙と加工美は古く發達したことが窺はるゝ。

越前の福井は紙の産地として名高い處である。墨流しの方法も行はれてゐる。鳥の子紙も製されてゐる。而かもこの地で最も名高いのは奉書紙であらう。これは頗る優美の紙で、外國に誇り得る紙の一種である。昔は此紙の用途が頗る廣く、和歌其他筆道につかつたばかりでなく、儀式典例にはこの紙が専用のものであつた。包装には流派を生ずるなど種々工夫を凝らし

たものだが、其の用紙も亦此紙であつた。用途が廣かつた丈それだけ製法も發達したが、現今の此紙はブク／＼して柔かに失し毛は立つて、遠く昔しの、に及ばない。昔しの、は柔か味があつて、同時に手堅い感じがあり、揉んでも毛は立たず、墨の乗りもよかつた。今のはロールが十分か、つてゐない感じがする。

美濃も亦紙の産地として有名である。普通用ゐる障子紙や罫紙などは抵ね美濃産である。書籍の用紙も多くは美濃紙を使つてゐる。然し美濃で一番製造に苦心したものは、岐阜提燈に張る紙だと云はれてゐる。此紙は典具帖と云うてゐるが、製法のむづかしい譯は、第一、薄くなければ、提燈に張つて燈光が發揮しない、第二、紙にムラがあつてはならぬ、第三、油を引かないことが岐阜提燈の特色であるから、相當に強靱でなければならぬといふ、むづかしい條件があるから、紙師が一番製造に苦心したといふも無理ならぬことである。これも御多分に洩れず今のはズット品が落ちてゐる。

美濃の徳の山と云ふ處では、水に這入つても文字が散らない一種の紙を製したことがある。

委しくは知らないが、或は明暦の江戸の大火に考へて、造つたものではあるまいか。昔の江戸

の大火には、一切の帳簿や文書は、匆卒の場合、池か井戸へ投げ込むより外に手段は無かつた。後に取り上げて見ると、悉く墨が散らばつて字が分らなくなるので頗る困つた。こんな事が動機で工夫したものであらうと思ふが、今其の製法が傳つてゐるか否やは不明である。此頃岩國の人から聞いたことだが、此國でも同じ紙を工夫したとある。同地の帳面に用ゐる紙は小豆色のと黄ばんだのに限られてゐると聞いたが、それが果して墨の散亂を防ぐ紙かどうか聞き洩らした。島根は元來紙の名産地で、石州半紙は頗る名高いものである。紙の質がよくて蟲が喰はず、そして割合に價が安い。岩國の製紙も、石州の感化を受けたものではあるまいか。

土佐も亦紙の産地として名高い。土佐半紙と云へば全國に行き渡つてゐる。半紙の外にもいろ／＼あるが、爰には一種特異の紙を擧げる。それは藥袋紙である。漢方醫が藥の包装に之れを用ゐたのは濕氣を防ぐ特徴があるからで、色は黄ばんでゐる。書籍の表紙にも多く用ゐられた代があるが、矢張り防濕の用意から來たのであらう。此紙に就て「杏林内省録」といふ醫家の隨筆に據ると、これは山内公の秘製に係り、銃砲の火藥を包む爲めに特製したもので、之れに包めば氣が外に漏れず、兼ねて濕氣を受けないといふ特徴があると云うてゐる。所謂の御留め

紙で、多く賣ることを許さなかつたといふから、偽物も出たに相違ない。其眞贋を鑑定するには、紙の一端へ火をつけて見ると、眞物は線香の火を點じた丈でも決して消えることが無いが、贋物には火が直ぐに消えると云はれてゐる。土佐には製紙の業が發達したから、こんな工夫も出來たのだが、現今紙の當業者から聞けば、土佐は甚だ評判がよくない。土佐は製紙が上手であるだけそれだけ手を省く猶法にも長じてゐて、種々ズルイ事をやる。それが一般の製紙業者にも及んで、悪感化は追々一般に浸潤する傾向があると聞いた。

各地の紙の特質を擧げるとは到底匆卒に出來ないが、爰に前に漏れた二三特徴のある紙を擧げれば、灰汁打あいくちと云ふ紙がある。間合まあひといふのがある。前者は映寫に用ゐられ、後者は重に壁張り、襖、屏風などに用ゐられ、軟かでベタ／＼したものである。薄葉うすはと雁皮も、薄い點に於て典具帖と同じ様な特徴があるが、薄葉と雁皮は典具帖に比して紙質が硬堅である。薄葉に似て更らに精良で、其質も一層硬堅であるのは竹紙たけしである。これは今日餘り見ないが、ペンの使用出來るのは西洋紙に似て西洋紙以上、世界に類のない紙である。日本の世界に誇り得る紙の一つはこの竹紙なども其一つだと思ふ。これは第一紙質が薄いから、一冊に多くの紙數を使

つても嵩まない。墨つきが好くて、濕氣を受けても害がなく、蟲がつかない。嵩がなくペンでも書けると云ふので、維新前後の洋行者は行李に必ず携へたものであつた。今日でも極く小さな本を作る時などに用ゐられ、或は仕掛花火の風船を作るに用ゐられてゐる。尙ほ此他に漏らす可からざるは、まき 桎まきといふ紙である。これは錦繪を作るに必ず要するもので、錦繪の美を發揮するのは此紙あればである。色は純白で、ふつくりした氣味があり、奉書よりは薄くて堅く、美人の顔の柔かな皮膚の感じを艶美に表現するには、畫工の手腕以上此紙の功德によるといふても誣言でない。

以上を考へると、日本の紙は世界に比例のない色々の特徴を持つてゐることが會得されよう。然しこれらの特徴もやはり當業者の専門秘法になつてゐて、單に口傳くわんで傳統されるのみだから、古老が減びると共に段々消えて行く。古い書物を複製する時に百方搜しても容易に紙の見當らないことがあるのは實に惜むべきことと思ふ。

全體書物の美術的中樞は何かと云へば、どうしても紙に條件のあるのは否むことが出来ぬ。紙は趣味を感じしむる大切な道具だ。然るに之が文化の進むにつれて却つて退歩し、粗惡な品



質のものが幅<sup>は</sup>を利かして、良質の紙が影を潜めて了ふのは經濟學のグレシヤムの法則の適用さる、譯で、機械偏重と大量生産の結果餘義ない次第とは云ふもの、趣味の爲めにも、又日本の特質を尊重する上からも、今日に於て何等かの方法で研究保存する途を講じ度いものである。但だ爰に最近の痛快事として録すべきことがある。それは早稻田大學の新圖書館の壁畫を書く料に、特に製した未曾有の大紙に就てある。既往のレコードでは、幅九尺長さ二間といふのが最も大きいものと云うてゐた。禁裏御所でも、將軍家でも、これより以上の大きな紙を造らせたことは古來ない。然るに今度早稻田のは三間四方であつて、堅硬でもあり、質も非常によく、畫家の大觀觀山二氏も、これならばと満足してゐるものであるが、これは福井の製紙家岩野平三郎氏が特別の苦心で僅かに十枚造つた。原料は麻が二分の一、雁皮が三分、楮が二分で、如何にも優美な紙で、墨色が十分發揮して比類のないよい紙である。斯様な減法界もない大きさの紙を作るには四間四方の船を要し、それがコンクリートで特設され、それに装置する金網のごときも圖外れに大きい爲め、特に製作を要したは勿論、壓搾器、其他乾燥若くは光澤を出す諸設備に至るまで、皆特別の工夫を要し、幾多功程の經過中に、意外な失敗を

重ねて幾んど幾回か絶望を感じながら、苦辛をつゞけたので、僅かに成功したのは真に天祐である、製造家は言うてゐた。その苦心の次第は専門に屬するから、爰に委しく語ることを略するが、一事を語れば、他も恐らく推測出來ようが、其の一事といふのは、四間四方の船に水を張つて、イザ水を去る段になると、水に波が立ち瀬まで生じて、おのづから水路が出來、紙の原料はそれに動かされて不平均を生じ、水の去つた後を検すると、紙に龜裂を生じてゐるの痛く失望したといふ。手漉きなれば何でもない事が幾百倍の大物となると、水の平均を保ちつゝ、それをぬき去ることすら容易のものでない。此の失敗から幾んど寢食を廢し、機械代りに自在の働きをする多くの職工を用ゐて、漸やく水の流出の不平均を制したと云ふことである。此の紙の製造は日本製紙史上特筆すべきことである。

## 五 包装と裂地

世界中で日本程包装法の進んで居る國は無いと思ふ。此に包装といふのは廣い意味で云ふのは無く、主として貴品、重器を包装することに就て云ふのである。貴品、重器にも色々ある

が、或る時代に於て茶器が非常に尊重せられ、其の餘風が今日も尙ほ茶の社會に存して居る。ひとり茶道のみで無く、種々の方面に其の影響が及んで居て、或る意味に於ては、すべての藝術は茶器を中心として發達したといつても過言でない。此に述べる包裝法の如きも、亦茶儀に伴つて發達したものに外ならぬ。

勿論茶器と云うても種々の別があり、其の形も亦まち／＼である、それに相應した袋を作るのが、即ち包裝である。此の袋を作るといふことが、一種の藝術となつた。袋には紐ひもがある。随つて紐を製することにも、其の紐の結び方にも種々の工夫が凝らされた。袋に入れた上に、箱に入れる。其の箱を作ることも精巧の極に達した。箱といつても色々ある。普通に箱といへば上箱うへばこを指していふのであるが、其の上箱でない箱もある。たとへば茶入の形通りに出來て居る箱、即ち丸い壺のやうなものに對しては丸い箱、肩衝かたつぽといふ、肩の張つた、稍々細長い茶器を入れるには、矢張り其の形のやうな箱が要る。是は轆轤で挽いたものである爲に、普通挽家ひきやといふ名が附いて居る。それには牛地のももあるが、多くは漆で塗られて居る。右様の箱の上に、更に同じやうな恰好の箱を附けることがある。其上に、今度は角形かくがたの上箱を附け

る。そして袋は其の挽家までも入れるやうにして作られる。如何にも複雑なもので、之を見ても、器物を大切にする爲めに、如何に包装に力めたかといふことの一端が窺はれる。

其等の事に就ては各々長い説明を要するが、差當り茲には袋を作る材料に就て、聊かいうて見たい。此に材料といふのは裂地きれぢのことである。此の裂地は一科の藝術を成す程面倒のものである。百千と數へる程の裂地に色々の名前がついて居る。又色々の時代があり、色々の國の生産がある。呉服の専門家でも解し兼ねる程複雑であつて、茶道の人でなければ名の知れぬものが少なくない。否、茶道の人でも、袋地を特に研究した人でなければ解し兼ねる程、専門的のものである。全體茶器の包装には、器物を大切に保存する爲といふ外に、裝飾の意味も加はつて居る。即ち包装に依つて器物に興味を添へるといふことが、袋の役目である。それ故一つの器物に對して、種々の異なつた袋が作られる。名物茶器めいぶつなどになると、必ず三つの袋が要るとせられた。三つの袋を作る所以は、折と場合に依り袋を異にする爲である。たとへば大名の茶席などいふ場合には、金襴の袋を用ゐるねばならぬ。意氣な席には縞裂しやうぎれを用ゐる。わびた席には緞子の袋を用ゐるといふ如く、其の席と調和を保つために夫々袋を選ぶのも、袋が物を大切に

保つ職務の外に、裝飾の務めがあるからである。又器物そのものとの調和を保つためにも、時代ある器物には時代裂を用ゐる、外國から來た器物には外國産の裂地が用ゐられる。包装が單に器物を保存する爲めであれば、それを蔭で引離してよい譯であるが、さうではなく、包装その儘茶席に持出すので、即ち包装に依り茶器に光彩を添へるといふ譯であるから、従つて其の裂地は非常に吟味を要することになる。茶人が裂地を得るために多大の精力を費したのも、謂はれないことではない。

茶人の世界では、支那の唐宋あたりの織物が色々弄ばれた。其の織物は本國の支那でさへ非常に稀なものであるのに、物は好む所に集まる譯で、是等の織物が日本にかなり多く渡つて來て、それが包装に役立つたといふことは、驚異に値ひする。勿論此の時代裂を得るのは、決して容易なことではなかつた。古い時代に支那に赴いた高僧の袈裟や、或は其他の衣類のやうなものが日本に保存されて居る。其等のものがつゞされて、包装用のものとされる。又聖徳太子の用ゐられた蒲團の裂が隋あたりの製造であるといふので、それが袋地に採用せられるといふ譯であるが、併し高僧の袈裟にせよ、太子の蒲團にせよ、皆寶物となつて居る大切のものであ

るから、矢鱈に之を用ゐることは出来ない。たゞ頗る地位の高い人が其れをなし得た位である。斯様に稀れなる、貴い裂きずとなると、一寸四方位の断片を得ることすら容易でなく、従つて小さな袋を作るにも、巧みに其の断片を縫合せて作つたものである。同じ柄の裂のない時には、別の裂を縫合せることもやつた。古いものは、何といつても寺院に多く存してあるから、此の裂地も寺院と密接の關係がある。元來茶そのものが寺から生れたものだから、それは自然の養縁でもあるのだ。高僧の袈裟、其他の織物類で、茶人が其れに因んだ名を附けて、たとへば夢窓國師の袈裟を摸して織つたものを、夢窓裂むそうざくれというたりした類は少なくない。又寺の名の付いた、いろ／＼の裂がある。それは多くは寺の藏品に因んで居るのである。

又往時交通不便の世の中に於て、印度或は土耳其あたりから、色々の織物が、不思議な程多く舶載されて、それが茶人に珍重された。たとへば間道かんだうといふ繙の裂は、近頃の研究では、土耳其のものといはれて居る。それからモールといふものがある。或は回々織ともいはれて居る。之れも土耳其のものである。和蘭木綿といふのは、其名の示す如く和蘭裂である。是等色色の裂も夫々時代が違つて居て、古いもの程稀れである爲め珍重される。古渡り、中渡り、後

渡り、近渡りなどいふ段階が附いて居て、其の最も古いものに極古渡りといふ名が命ぜられて居る。其の段階に依つて等級が定まり、又價も定まる。唯だ古いから稀だ、稀だから貴いといふ計りではなく、古いのにはやはり優秀の品位があるからでもある。茶人の眼はいかにもすぐれたものであつて、呉服屋よりも、機屋よりも、よく行届き、裂地の鑑別と選擇には、驚くべき能力があつた。即ち裂地に於ける伯樂は茶人であつたのだ。普通の人が無意識に委棄して居る裂地の中から取上げて、珍としたものも少なくない。

又茶人が其の獨自の趣味の上から取上げたものも多くある。たとへば支那の天子の御璽の据わつて居る誥命書こめいしょといふものがある。それは織物であるが、其の印の所をくり抜いて、之を袋地に用ゐる、日本風に御朱印裂ごしゅいんざれと呼んで居るなどは、趣味の上から取上げた一つの例である。全體茶は何から何まで趣味のもので、器物も茶人の思惑から、支那其他の雜器を取上げ、其形や色や、其外色々の所に面白味を見出して、本國の生産地では思ひも寄らなかつた所に味を附け、之れを趣味あるものとしたのであるが、之れに用ゐる袋の裂地も、同様に時代から、織方から、模様に至る迄、皆趣味的に見立て、器物に風流を添へたものである。だから其の裂に

命じてある名を聞いた丈けでも、史的趣味を感ぜずには居られないものが多い。たとへば紹鷗裂とか、利休裂とかいへば、有名な茶人の衣服に用ゐた紬の裂をいふのであつて、其の名を聞けば、何人も此の二大茶人を聯想する。興福寺裂、法隆寺裂、本能寺裂などは、何れも皆是等古刹に存する金襴や緞子に因んで名けられたものであるが、斯様に有名な寺の名の附いて居る丈けでも頗る趣味を感ずる。況んや其の織方などに於ても、一種特異の趣味あるに於てをやだ。高僧の名を冒して居る大燈裂は大燈國師の衣類を本として命ぜられたものであるが、そんな莊嚴な名計りでなく、優しい遊女に因んで、吉野といふ名妓が好んで着たといふ間道があり、又定家といふ遊女が其襦袢に用ゐた定家緞子といふ裂は、既に名物裂に數へられて居て、其の來歴に於ても甚だ趣味を感ぜしめる。或は又包まれてある名器から名を得たもの、持主の名から命じたものなど様々ある。西洋あたりの分類法から學術的に名前をつける方式から見ると、如何にも勝手千萬のやうに見えるが、風流の味は寧ろ茲に在つて存すると云はねばなるまい。



## 六 玩 香

今日では香水がよく流行して、女は勿論、男子までも盛んに香水を用ゐる。この香水中々色色な階級があり、高いものになると一滴何圓といふ程のものもあつて、贅澤物の標本となつてゐるが、一體香を聞いて喜ぶことは非常な高い趣味に屬する。日本では古くは液體の香を玩ぶことがなかつた、香はすべて之を焚いたものであつた。

この香は初は佛に獻ずるといふことから起つたものであらうが、それが追々色々な事に應用され、茶儀にからんで種々の發達を遂げ、趣味的に追々工夫されて一種高尚なる遊戲ともなつた。明人高瑞南の「遵生八牋」に香のことが多く出てゐる。そのうちに香の趣味をいろ／＼擧げてゐる。獨坐して心を清めるによいとか、茶を煮る時によいとか、吟詠の同伴とするによいとか、睡魔を避けるによい、月を見る友とするによいと、支那流に色々擧げてゐる。その中に、美人と火爐に手をかざし密語を交へ、そこへ香をたくと情熱が昂まり、心のときめきを禁じ難いなどと大分お安くない事も云つてゐる。

## 蘭奢待より一木四名

香を天平時代に早く既に珍重したことは、正倉院の御物のうちに蘭奢待らんじやたいのあるのでも分る。然し香を弄ぶやうになつたことはさう古くないので、歴史の天子のうちで最も香を遊び、且つその道に極めて堪能であられたお方は後水尾天皇だと傳へられてゐる。

香と云へば誰でも直ぐ思ひ浮べるのは前にも云つた蘭奢待であらう、これは矢張り伽羅くわらである。専門家の説では、これは評判の高いものだが、餘り結構な物でない、寧ろ一木四名と稱されてゐる名香が却つてこれより以上だと云うてゐる。一木四名とは、一つの伽羅を四つに分けて、彼方此方に珍藏されてゐる、それに別々の名のついでゐるのを云ふ。帝室にあるのを藤袴はまばな、小堀公のを初音はつね、細川公のを白菊、仙臺侯のを柴舟しばねといふ。これが蘭奢待にも優る最上の伽羅である。

一體香は南洋に産するものが最もよい、その香の名は皆産地の名がついてゐる。それは六國七種というて次のやうな名稱がある。

一、古伽羅

二、羅國（シヤム）

三、真奈伽（マラツカ）

四、寸門多羅（スマタラ）

五、真奈釐（マナヒル）六、佐會利（サエリ）

七、新伽羅

昔斯様なものが長崎へしきりに輸入されて来たとき、大名が争つてこれを得ることに努めた。中々富んだ大名と雖も、その輸入し来たもの一本全部を買ふわけには行かず、その一本のうちの或る要部を競つて買ふことをつとめたもので、それが爲に立派な家來などを派遣した。競争の結果、他の大名によいのを取られたといふので、切腹した士さへあつた。

かほどに香の趣味が貴族社會に廣まつて、珍香を得るには全力を盡した。今こゝに香を語るのは其全部に就てはなく、只極めて一部分のことを云ふに過ぎない、それは主に鬪香に就てある。

### 鬪香の面白味

初は香を聞くことも極めて單純であつた、それが追々複雑になつて、意外な發展をした。支

那では元の時代に鬪香が初まつたとある。これは多分香の優劣を争つたものであらう。日本でも勿論香の優劣を鬪はしたものであるが、尙其外に香の聞き手の優劣を鬪はした。兎角勝負事しやうぶじにならぬと興味が薄い所から、玩香も勝負を中心とすることになつたが、上流の社會に行はれた丈に、飽くまで品位を保ち、金錢や物を賭けるやうなことはなく、勝者には賞状を與へて其の名譽を表彰するに止めた。

併し、勝敗を決するにも其法が餘り單調では興味が無いから、種々の工夫を凝らし、それが段々に複雑になつて、自然流派も生じ、それ／＼の流派で特種の法を定むるやうにもなつた。今は到底各流の法式を陳べる譯には行き兼ねるから、極めて大略を云ふに過ぎぬ。

大體鬪香は双六のやり方に倣つて工夫したと思はれる。双六にもいろいろ種類があるが、通例は或る所に障礙物があつて、そこまで行くと遮られて、後戻りをせねばならぬことになつてゐる。これは誰れも知る通りで、双六の興味は斯様な變化にあるのだが、鬪香に於てもいろいろの變化に興を持たせてゐる。但だ双六に於ては平面の紙に畫を描き、それを勝負の具に供してゐるが、鬪香にはそんな安つばい趣向でなく、道具にはいろいろ立體のもの迄用ゐて、頗る

芝居が、つてゐる。鬪香に第一必要としてゐるのは一面の盤であるが、この盤は謂はゞ舞臺のやうなもので、その盤の上に人形が活動する、其他大道具とも見るべきもの、又いろいろ細かな小道具と見做さるべきものもある。

鬪香の工夫は、つまり双六と芝居を合併したもののやうだ。香道の本筋から云つたら、俗になつた嫌ひがあらうが、然し工夫はあくまでも高尚で、詩や歌や古い物語などから意匠をつけて、どこまでも優美であり、その道具は精巧目を驚かす程美術の粹を盡してゐる。今いろいろな鬪香の例をとつて双六並に芝居に近いことを云つて見よう。

### 雙六と芝居に似る

例へば羽衣香と云ふがある。浦島の故事を取つたもので、人物は天女と釣人で、二つ人形がある外に、松がある、そして羽衣には紐がついてゐて、松の枝にかけられるやうになつてゐる。此松を盤の中央に立て、盤の兩側の溝に二つの人物が置かれ、香の聞き分けの當否で人物が進退し、松に羽衣を掛けたものを勝とする趣向であるが、茲に劇の小道具と見るべきは、松

と羽衣である。又拾貝香といふがある。盤の上に三十六歌仙に擬して三十六の貝を置くのだが、盤面の一半は蒔繪で波たつ海面をあらはし、一半は陸に擬して梨子地で砂の趣をあらはしてゐる。此の海陸兩方に十八づつの貝を位置よく置き、香の聞き方の當否で海中の貝が陸に上つたり、陸上のものが海に入つたりして、結局其數で勝敗を見るのだ。こゝで背景と見るべきは海陸で、小道具は貝である。こんな平面の背景はいろ／＼ある。曲水香といふのは、川の流が金の蒔繪になつてゐて、一つの巖石が中央に横つてゐる、それが決勝點である。盃を水中に流し其の遲速で勝敗を決するのである。即ちこゝには川が背景で、盃が小道具である。こんな風に平面に繪をかき、それを背景とする計りでなく、立體の背景もいろ／＼ある。即ち木樵香といふのは山の盆景を作つて、盤の一方に飾るのである。これは大道具と見做さるべきものだ。又源氏香の内うちで關屋香には逢坂あきさかの關と瀬田白川を形どる爲に橋を飾る。これも立體の背景で大道具である。又椿姫香には、屋臺の上に二人の姫の人形をならべて、屋臺に翠簾をかける。これなどは全く芝居がかつてゐる。又舞樂香には幔幕二張を張り、樂の太鼓をも飾る。舞臺と見做さるべき盤は通例長方形であるが、圓形のものもある。立宗と楊貴妃の扇軍の香などには

圓形の盤を用ゐることになつてゐる。

### 故事風俗に因むもの

以上は香道で、所謂立物の一斑を擧げたのだが、いろ／＼故事を案じた意匠の内にはなかなか凝つた工夫がある。例へば陸奥香では人物が西行と能因で、それが東西に立ち別れ、西行の方には道邊みちのへの松があり、又宮城野の萩がある、能因の方には武隈たけぐまの松と白川の關がある。西行能因の進退は、松や關所に阻止さるゝやうになつてゐる。丁度双六で或る地點に達すると休まねばならぬ所があると同じだ。蟻螂香には、盤の中央にかまきりが置かれてあり、一方には僧形の人が琵琶を弾じ、一方には直衣なうしをつけた人物が琵琶を弾じてゐる。これは昔、妙音院の御前に妙觀といふ僧と孝定たかまといふ公卿が琵琶を弾じて、その琵琶の妙音でかまきりを惹きつけた方が勝となる故事に基いたものである。其他孟嘗君が雞の啼聲をまねて關所を通つたといふ故事や、立宗と楊貴妃が双方に別れて、侍女に花の枝を持たせて花合戦をしたといふ故事や、孔明の八陣になつた複雑の趣向もある。

日本の故事風俗によつたものでは、鵜舟だの蹴鞠だの鷹狩だの枚擧に暇ないが、中に極めて複雑なのは黒木香である。これは黒木を頭に戴いた賤の女が黒木を背に負うてゐる牛をひき、それが五組、盤の上を行進するのだ。途中に枝折戸が五ヶ所かざつてあつて、それを通り抜けねばならぬ。それから又決勝點に達するに立派な門がある。それに入ると、黒木の代りに賤の女には花の折枝をもたせ、又綾の巻物を持たせる。然るに女と牛が同時に達しない時はその門を開かない定になつてゐて、香の聞き方の巧拙如何によつて牛が遅れることがある。人間が進んでも牛が遅れては門に這入れない、その面倒なところに興味を持たせてある。

### 雅びな源氏香

こんな工合に鬪香の式は様々あつて、今は只其一端を云ふに過ぎないが、源氏香などと云ふものは「源氏物語」に因んで工夫したもので、源氏は五十四帖あるけれども、源氏香は五十二種になつてゐる。香の組み合わせでいろいろな形が出来る、その形は「香の巢」と稱へて如何にも雅なものであるが、これは香のくみ合せを表示したもので、五本の線が五種の異つた香を示



してゐる。そのうち同じものは上部に横線を引いて連絡し、同一の香であることを現はす。かやうに色々に表示が出来るが、數理的に五十二種以上は出来ない。それが爲に源氏になぞらへたものながら、五十四帖のうち首尾二つだけ省かれてゐる。この香の巢は符號のやうなものであるが、それが何となく雅な工夫である爲に後には一種の模様となり、或は器物に描かれるやうになつた。これは多分種彦が「田舎源氏」を書いて、表紙などに美麗に此符號を應用した所から手廣く流布することになつたものであらう。

## 七 温泉と文藝

日本人は世界で最も風呂好きな國民である。火山國であるから温泉が豊富であり、清潔を尙ぶ習慣があるので、共同浴場が到る處にある。江戸ッ兒の日中行事は朝風呂に入ることから始まり、貧人と雖も風呂をかゝさぬ。日本人の道樂は風呂であると云うても誣言であるまい。斯る國土に於て風呂が文藝に没交渉であらう筈は無い。式亭三馬は早く風呂を材料として小説を書いた。それは「浮世風呂」である。錢湯は全く或る時代に社交俱樂部であつた。今でも尙ほ

其趣がある。近隣の男女が互ひに語を交へるも此處であり、不見不識の人と交はるも此處であつた。或る時代には湯屋には二階があつて、湯女が茶菓をすゝめた。碁盤將碁盤も往々具はつてゐて、僅かの錢を投ずれば半日遊ぶことも出来た。實に安直な遊樂俱樂部であつた。明治の初年には風呂屋の建築法が今日の如くやかましく無かつたので、多くの浴場が出来たことがある。それは舊式の石榴口ざくろぐちを撤して氣分のよい新式で、湯女もゐるたから、多くの書生はこゝに遊んだ。今のカフェーに比すべきであらう。或る老人の話に、昔は物價が安く、天保錢一枚、それは九十六文に當るものだが、その九十六文で床屋で髪を結び、手拭一本買つて、錢湯に這入り、殘金で夜鷹よたかが買へたと云ふ、浴錢は如何にも安いものであつた。市井の浴客は、湯に入りながら淨瑠璃を語つたり、新内をウナツたりして、爰を音曲の練習所とした。無名の作家がこゝに材を得て數知れぬ川柳を詠じ、戯作者が其の鬱屈をこゝに暢ばして更らに筆を新にしたり、又思構をこゝに練つたりしたことが幾許であつたらうか。少なくとも俗文學が朝湯に負ふ所は少なくなかつた。元來浴は氣分を爽快清涼にするものであるから、それが精神に重要な影響を與へ、それがやがて文藝に反響を及ぼすことは言ふまでもない。

風呂に就ての史實を案するに、古く光明皇后が病者の垢をお手づから流されたといふ著名なことは今更語るまでもないが、頼朝が海水に浴して神を拜したり、武士が清淨潔齋して死に就いたり、頼家が修善寺の浴場で暗殺されたり、三代將軍が青年時代浴場で近侍に戀慕されたり、抱一が八百善に風呂を作らせて割烹店に風呂の備はる端を發したり、高杉東行が浴しつゝ、あつた愛婦の裸體の注進で捕吏の襲撃を免れたり、巖谷龍一が一生のスネ物富永冬樹を浴場に延いて應接し、流石の富永をアツと云はせたり、大隈侯が一浴百憂を一掃したりしたなど、風呂に就てのアネクドットは少なくないが、悲劇喜劇さまざまであるけれども、皆な風呂の享樂を頌するものに外ならぬ。

温泉のある所には概ね寺があつて、靈泉と宗教が絡んでゐる。随つて温泉の地には名僧の詩文が多く遺つてゐる。文人墨客の澡泉に浴するものは、必らず何等かの什を留めてゐる。横井也有は熱海に遊んで其の集に無い記文を草してゐるし、眞淵の門下で才媛と聞こえた油屋倭女子は伊香保に浴して名高い伊香保紀行を書いた。數へ来れば温泉文學は大層なものである。

尙ほ政治上に就て云へば、其の行詰りが往々温泉會議で解決された例もあり、浩漣な報告書

や論文が温泉で書かれたり、千古の名著も濛々たる湯氣の中から出てゐることを考へると、温泉と文藝とは決して交渉が薄いとは言はれぬ。

私は曾つて温泉の今昔を比較して、その相異の甚しいのに自から驚いた。昔しの温泉行は全く養痾の爲め不便を忍んだものであるのに、今は養痾は必らずしも單なる目的でなくなり、いろいろと新たな目的も加はり、寒季には避寒、暑候には避暑にゆく。これ等も養痾の範圍内だといへば言ひ得るが、その内容を解剖すると、強ちそのためではなくて人を避けるためとか、愛人と水入らずに會するためとか、頗る複雑な意味があつて、決して昔しのやうな純粹のものではない。

自分は九州の別府に一二度浴したことがある。同所は日本から大連あたりの植民地に連絡もあり、歐洲とも亦同様で、外から内地へ來るには先づこゝに足を留めて疲労を慰するに適當な地形であるから、その點からいへば、この温泉場は一種の港ともいふほどのもので、繁昌するのも當然である。自分はこの地に滞在中にいろいろとおもひを馳せて、この地に在る浴客はどんな人々かと考へた。卒然として見る時は、いづれも甚だノンキなもので、飲食その他贅澤三

昧に日を暮して、殆んど如何にして金を使ふべきかに苦んでゐるらしい。併しそれは成功者や成金連などが多く眼に映するからで、こゝには失敗者も破産者も皆集まつてゐるに相違ない。あるひは身を匿すために、あるひは回復の案を畫すために、人知れず苦心懊惱してゐるものも來てゐるであらう。世界を股にかけた詐欺師や泥棒もゐるであらう。國事探偵や美人局専門つもとせの美婦なども紛れ込んでゐるであらう。表面はさあらぬ様に見せかけても、この土地ほど秘密を包藏する多くの人間の集まる場所はあまいと思ふと、何となく興味の底から、多少不安の氣の起るやうにも覺えたのである。

自分の右の如き觀察は、必ずしも空想でなくて、今の温泉場、就中別府のやうな要衝の地には随かに存在する事實である。一と口に浴客とはいふが多種多様で、西洋でも探偵の入込むところは温泉場だといふが、日本も今はそれに近くなつてゐる。昨今我が小説家が材料に窮すると、筆を載せて温泉場へと出かけては何等かの種を擱んで構想を定めるのも、畢竟こゝに秘密が潜んでゐるからである。イヤ秘密があるからといふよりも秘密が探り得られるからであらう。小説家のいふことは必ずしも事實でないにしても、温泉場に得た材料といへば、いかにも人の

の頗く譯は、即ち温泉場が探偵の腕の揮ひ場所であるからだ。大體小説家が探偵小説を書くのに、舞臺を温泉場に藉りるのも、勿論この故である。若し温泉場に照魔の鏡があつて浴客の暗黒面を暴露したら、驚くべく、憎むべく、將た笑ふべき、種々なる化物の正體が見られるであらう。

これから追ひくと温泉が開けてゆけばゆく程、罪の巢窟になる傾向がある。これを昔の單純な時代のそれと比較したら、實に非常の變化ではあるまいか。男女の關係が漸次西洋風になり、婦人の貞操が不安になり、自由結婚が追々行はれ、藝娼妓の外に女優など、いふものも出來、それらの活躍する舞臺となるものは、多くこの温泉場であるとする、單にこれだけでも温泉場が風紀上の注意場所であつて、昔と天壤雷ならざる相違のあることが知られる。

然らば昔の湯治場はどうかといふと、單に糧を齎した位のもので、随分不自由を忍ばねばならなかつた。それが今のやうに贅澤になつて、何不届もない安樂郷になり、旅宿も驛路の旅館よりも遙かに立派になつて、或る意味では料理屋をも兼業し、藝者も來ればその他の藝人も來る、自動車がある、東京へ電話も通ずる、金次第で大抵の事が出来る。かうなると、病なきも

のも家族を伴れて團欒を樂しむ。新婚旅行者も此處を選ぶ。風流の士も茲處に吟策を曳く。平素繁劇の事務に當るものもまた來つて安息の地とする。宿痾のあるものは素よりこゝで療養を續ける。繁華になつた湯治場のブライトが種々あるが、更に暗黒面を見ると、それは富貴を銜ふところで、身分不相應の贅澤三昧から隨分産を破ることもなる。良家の婦人が節操を害ふことも珍らしからぬ。今の温泉場は誘惑の地である。罪惡の避難所もこゝであり、その策源地もこゝである。何の秘密もない遊樂の地の如くにして、其實恐るべき秘密の隠れ家である。疑問の人假裝の人が好んで立てこもるところである。今は交通自在のために、劇場やカフェーや寡婦の家や破倫の夫人の家などは近い待合茶屋に連絡せずして、却つて隔つてゐる湯治場に連絡してゐる。温泉場の沿革を考へて見ると、僅かに五十年経つか経たぬに斯うまで驚くべき變化をしてゐる。さらにこれから五十年後には、如何なる驚異を持來たすことであらう。

今日の温泉場は、一口に云ふと複雑な社會の縮圖である。此の小乾坤には、善も惡も、文藝の資料に充實してゐる。性慾、戀愛、享樂、詐謀、欺瞞、煩悶、あらゆるものが湊合してゐる。こゝには社會の風紀の研究も出來れば、人間浮沈の研究も出來る。又人倫の研究から人間

心理の研究も出来る。一種の文藝は、恐らく將來こゝに起ることであらう、恰かも狹斜文學の起つた様に、寧ろそれよりも幾層規模の大なるものが起るであらう。ひとり探偵小説の擲場で無いことは勿論である。

## 八 旅

### 昔の 旅

旅は趣味のあるものである。併し旅は同時に不自由のものであり、いくらか危険の伴ふものであり、心細いものでもある。併し旅に伴ふ不自由、危険、心細い點が、やがて趣味を發する源となる。今日のやうに世の中が便利になつて、萬事萬端整ひ、何百里の道程も一日二日で行かれ、そして危険もなく、定まつた時刻に正確に目的地へ達し得るやうになつては、却つて趣味が薄らぐ觀がある。今の旅行は丸で東京市中を歩くのを引伸ばしたやうなものである。氣樂は氣樂であるが、どうも趣味が薄いやうに思はれる。全體興味を發するには種々の原因があ



る。思ひ掛けない事、換言すれば常經を外れたことに多く興味を發するものである。不自由、危険、困難といふことは、其即時には中々の苦痛で、一寸興味はないやうに思はれるが、併し時日を経てから考へると、其時の苦痛が他日興味を惹起す原因となるものである。今日のやうな便利な旅では斯様な苦痛も困難もない。後日回顧しても興味を喚ぶの場合が乏しい。

昔の人の言つた言葉に、可愛い子には旅をさせよとある。これは一面困難や不自由を體驗せしめると共に世惑人情を知らせるには、旅が誠によい學校だといふ意味で、如何にも名言ではあるが、然し其の辛かる可き旅行も、其人の境遇又は考へによつては却つて愉快に感ぜられて、殆んど苦痛、困難、不自由を感じない者もある。たとへば俳諧師又は雲水のやうな境遇から見ると、是等は旅行を以て一生の樂みとするやうなものであるから、普通人の味ひ得ない興味がある。正徳の頃芭蕉の門人乙州といふ者が書いた隨筆の中に、旅行の愉快なことを書いてゐるが、是をつまんで言ふと、「旅は辛いと言ふけれど決して辛くない。宿屋々々で持出す寢具は随分ひどいもので、脚もよくは收まらないやうな煎餅布團である。こんなひどい宿屋でも僅か二錢か三錢の金子を出せば、其の深切から扱ひ振り迄が違つて、直ぐに綿の厚い布團と取

り代へる。又油錢と言つて心付を出せば、俄かに燈心を増して薄ぐらい室が輝くやうに明るくなる。風呂の催促が早く来る。茶も新らしいのと入れ代へて、菓子なども添へて来る。馬を頼むにも宿屋から先づ心配して、安全なやすい馬を周旋する。朝も急立てるやうな事はせずに、御緩りとお立なさいといふ。僅かの心付が瞬間に斯う現はれ、いかにも現金で甚だ可笑しいやうではあるが、機能が忽ち現はれるのと、五十錢位（昔の金にて）で十日も二十日も便利を得られるのは、旅より外にはない事だ。旅慣れた人が、旅は氣樂である、旅は忘れられないものだといふ感じを起すのは無理でない。僅か一夜の泊りでも、其の宿屋と人情の關係が出来たり、是非又いらつしやいと言はれたり、二度目に行つた時には親戚にでも逢つたやうに、ひどく喜ぶといふやうなことを考へると、旅は憂いものなどいふ事は寧ろ間違つたことである」と言つてゐるが、いかにも其通りで、俳人の境遇からは斯様の感じが一層深いこと、思はれる。交通の不便な世の中では、無論膝栗毛で無ければ旅は出来なかつた。中々困難ではあつたが其興味は却つて深かつた。到る處の名山大川が人の目を駭かし心を靡ばせた。今のやうに疾風の如く走る汽車では雲烟の眼を過ぎると一般、風景を味はふ暇もなく、其名さへ知ることが出

來ない。膝栗毛の一徳としては、汗を流しながら大地を一步々踏むのであるから、我を迎へる山水に對しても深刻の印象を受けて、終生忘れ難い感がある。東海道五十三次といふ旅は膝栗毛時代の最も興味あるものであつた。徳川氏の制度で各藩の諸侯が江戸へ参勤交代するに、織るが如く此道を往來したので、驛路も宿舎も輿馬も頗る備はつた。到る處に旅客の口腹を満たす名物があり、旅情を慰むる名所があつたので、膝栗毛の勞も之れに償はれた。籃輿に搖られながら、一時間に僅か一里や二里を行くのは遅緩は遅緩だが、昇夫じやかまを相手に浮世話をしたり、土地の風俗人情を探つたりするも一興であつた。駄馬だばに跨りながら、馬夫まこのをかしく謠ふ俚歌を聞くのも一風流であつた。寒國を雪中に旅行し、橋きに乗つて急坂を下り、手に汗を握つたり、大河の出水に出遇つて人の肩に乗り、危く涉り果おほせたりするなどは皆當時の旅狀である。

朝未明に旅舎を發し、一里許り行き、夜が明け日光の上るを拜したり、人家より立上る晨烟を見るも氣持のよいものである。旅に疲れて退屈を覺える折柄道連れが出来て、心よく語り合ひながら行くなども、膝栗毛に伴ふ趣味である。半日ばかり歩いて、晝食をした、めに茶屋へ

着いた時の心持のよさ。早く宿屋へ着き、日の暮れる迄幾何かの時間があり、悠々とした心持は、  
是も一種の趣味といふことが出来る。或は道中の差支へから目的の宿しゆくに着けず、已むなく合あの  
宿に泊ると、宿屋の不十分な所から、色々の雑客と入込みに泊ることもたまさかにはある。斯  
様な場合には拘摸が交つてはをらぬかの懸念もあつて、一人旅には極めて心細く思はれ、荷を  
置いた儘一人湯に行く事も出来ないことがある。併し入込みの雑客から色々の話を聞くことも  
あながち興味がないではない。こんな宿屋の食物は無論口に合はない。其時荷物から用意の物  
を取り出して食ふも、趣きがあつて面白い。

或は暴風雨に逢つて、思ひがけなく津や港に船が、りしたり、或は夜中道を失つて難澁する  
やうなことは、今日の旅行には無いことで、昔は頻りにあつたのである。こんな事は固より不  
快には相違ない、實は旅の困難はかやうの時に最も痛切に味はれるものであるが、後日追懐し  
て見ると却つて此場合に興味を感じる。全體かやうな變に際しては、常經に外れた色々の出來  
事が起るもので、或は意外の人に危難を救はれたり、或は入込みの客舎で知人にめぐり合うた  
り、徒然の滞留に近所の名所舊蹟を探つて、前人未發の名蹟を發見したり、兼ねて一遊を望ん

でゐた古蹟をゆくりなく尋ねて、偶然宿志を充たすことが出来たり、或は風俗視察の名を藉りて遊里を覗いて見たりするたぐひのことは、こんな場合に多くあることで、それが其時若くは後日興味を覺える原因となるものである。さて又かやうな難澁の域を脱した時の快感は言語に絶する程で、今日の汽車旅行などの到底想像の及ぶ所でない。

### 山 岳 旅 行

旅を苦痛のものであると云うた時代は既に過ぎ去つた。今日の様に交通の便が開けた時に、旅立に親族故舊が水盃を取りかはすなど云うても、誰れも其の理由を覺り得ぬであらう。併し昔の旅を考へると命懸けの様なもので、其の交通不便の時代に於ては、道のない所を辿り行くこともあり、旅籠屋と云うても十里二十里の間に僅か一軒位ある様な次第で、それもむさ苦しい茅屋、唯だ雨露を凌ぐに足る程度で、何所の何人であるか、素姓も知れぬ掏兒、泥棒、人殺などを包含する色々の階級のものとして一室に雑居合宿するのであるから、一刻と雖も心の許さるゝものでない。或は喧囂の爲めに一夜殆んど寝られなかつたり、又深夜馬の嘶く聲や狼の遠

く吠ゆるを聞き、悲哀の感に打たれてシミ／＼旅の衰れを催すなどは、強ち遠き昔の事でない、今でも往還を離れて山地に踏み入れれば、斯様な處がない譯でない。まして深山に立入る一種の旅行、往々登攀家が試みる冒険旅行となると、今日と雖も困難は昔と少しも異ならぬ。幾千尺とも云ふべき高山に登る旅行に於ては、無論通路は定まつて居らぬ。深山の常として一夜大雨が降れば、前日迄無かつた所に忽ち川が出来たり、或は架してある橋が、一夜の内に無くなつて仕舞ふ様な變化のあるを常とする。斯様の處に何を辿つて行くかと云ふと、唯だ其の山道に通じて居る案内者を便りとするの外はない。二度三度同じ高山を登つた経験のある人でも、前に行つた道を辿つても再び行つて見ると全く地勢が變化して、溪流や橋などを當てにして行つては間違を生ずる基だと戒めて居る位である。今日に於ては參謀本部の地圖が出来ては居るが、山となると此地圖も餘り當てにならぬ。唯だ頼む所は日々其山に出入する其附近の樵夫の案内に待つ外はない。斯様の處には、やゝもすると猛獸の居ることもあり、勿論旅宿の設備のある筈はないから、勢ひ野宿の覺悟をせねばならぬ。特に寒氣の侵すことは想像外であるから、火を焚いて暖を取るの工夫もなければならぬが、やゝもすると燃料が濕氣に侵され、焚

火の出来ぬ事もある。或は道に迷つたり、或は相當食物の用意をして登つても、意外な出来事の爲めに山籠りの日数が豫定の外に出でたりして食物の缺乏を告げ、或は飲用の水すら容易に得ることが出来ない様なことがあつて、殆んど死活の危険に遭ふこともある。斯様のことは今現に高山に登る人の毎々感じて居る危険であつて、斯様な例を挙げれば、今日でも旅は容易ならぬ者と會得し得るであらう。さて昔は高山にあらずとも、少しく脇道へ這入ると、山中の困難に負けぬ様な事が到る處に多かつた。更に上代に溯つて見ると、困難は愈々甚だしく、旅立も出陣と同じく、生還を期されなかつた位なものである。支那の如きは、今日でも尙ほ旅行には夜具布團、鍋釜に至る迄携帯して行かねばならぬ所が多く、恰かも我邦の上代の旅の如く困難である。斯く考へると旅は苦勞のものである。併し苦痛が伴ふので趣味も生ずる。今日の如く汽車の旅行では樂な代りに趣味も薄い所から、追々峻峻の山岳を跋涉して快とするやうなことが行はれ出したのも偶然でない。

## 旅に要する豫備知識

旅にも種々の目的がある。唯だ或る地點迄達するが目的で、夜行汽車に乗り、寝ながら行くのもあるが、趣味の目的を以て旅をする段になると、之れには歩くとも相當の準備を要する。即ち幾何か其の人の頭腦に趣味を會得する知識がなければならぬ。唯だ漫然と歩く丈けでは、折角面白い風景美に接しても或は一向感興が起らぬ、如何に史的故蹟を訪うても何等の感懐も惹起さぬ。一體旅の趣味は何人にも感ぜらるゝものでない、どうしても相當の年輩になり、相當の教育がなければならぬと云ふことが要件である。京都邊の名所舊蹟を尋ねると何人も感ずることであるが、社寺の茶店に茶を賣つて居る老婆などは、流石に場所柄丈けあつて、其の語る所を聞くと、田舎の歴史家よりも遙かに旨いことを云うて居る。やゝもするとお客の知らない年號などをべら／＼口走る、兎もすると立派な紳士が此の婆さんに教へられて、多少のヒントを得たりすることがある。此の老婆は京都の如き歴史に富んだ土地に生れ、且つそこにそだつて居るから知るともなしに知つて居るのであつて、敢て教育があるでは無いが、せめては其の婆さんに教へられて、それで趣味を發する位の能力が備はつて居らなくては、旅をしても無駄である。今日修學旅行と云うて、或程度の學校に行はれて居るが、趣味の教育上善いことに



相違ない。然し小學程度の幼稚な子供に名所舊蹟などをヤタラに見せて廻ることは、チト考へものである。と云ふのは、此程度の小児には未だ趣味を感じる能力が乏しく、従つて趣味あるものを見ても趣味が起らぬ、他日頭の發育した時分に初めて感じ得べき、アタラ趣味の區域を幼稚な時代に喰ひ荒させては、一知半解の生カジリが寧ろ他日の損となる虞がある。修學旅行も、兒童の能力に應じて其區域を選ばなければならぬ。我邦人は兎角高尚の事は知つて居るが、案外普通知つて居らねばならぬ事を知らぬ。別して専門の學術を修めて居る人などに此の病がある。平素は自から敢て不便を感じぬが、旅行をするとシミ／＼不便を感じる。例へば英國あたりへ旅行する人は、一ト通り教育のある者が多い、又高等の専門學を修めた人も少なくない。然るに兎もすると西洋の中學程度の者が熟知の事實を知らぬ爲めに、折角名蹟を通過しても勝地を踏んでも一向感興を起さず、夢中に通過することは珍らしくない。蘇格蘭にはウォーター・スコットが詩人として古來非常の尊敬を受けてゐて、いろ／＼其の遺蹟があるが、此の詩人の大體の經歷や、“Lady of the Lake”（湖上の佳人）が此人の詩である位の事を知つてゐるでなければ、詩中の湖水を觀ても其邊の風景を見ても感興を發せぬであらう。又此の

大詩人の記念塔の下に立つても、何等の感懐も起らぬであらう。又ウエバリーと名の附いて居る橋はスコットの“Waverley novels”から来て居るのであるが、それを知らんでは何も氣付かずに經過するであらう。英國にしても同様で、例へばウエストミンスター・アペーを見ては其の殿堂の廣大なるに感服するであらうが、英國歴史中の大事件は多く此の寺院に絡んでゐる、然るに其の一端すら知らぬとあらば此の殿堂も一向面白味が無いに相違ない。事實を知るは趣味の動機であるから、相當の教育が旅行者に必要なことは云ふ筈もない。今日の大學程度の學校を出た人でも外國の事になると、文科出身は別として、やゝもすれば是等外國兒童が周知の事を全く知らぬ人もあつて、現に洋行中不便を感じた人がいくらもある。畢竟高い程度のこととは教はつて居るが、西洋で有り觸れたことを閑却してゐるからである。日本の名山大川、其他大事件に關係ある名所舊蹟を尋ねるにも、相當の頭腦備はり、且つ種々なることを味ふに足る年輩が趣味旅行に必要であることは勿論、素養ある人と雖も、旅行前、人に聞き書に見て特に多少の準備をなすことが肝要であらう。

## 旅と風景美

旅行家が最も愉快とする所は自然の風景美に接觸することである、自然を味ふことは旅行に於ての大なる獲物である。處で此の風景美に就ても注意を要する。昔し交通の開けなかつた時代には人のトツキ易い所の勝景が一概に著名のものとなつて、或は日本三大景とか十大景とか、或は支那に倣うて八景など、云うて數へられ、夫より以上の風景は日本に無い様にして囉され、詩歌に詠まれ、文章に書かれて激賞を受けた。又景色の局部にも色々の名が附き、巖に就て云へば、其の形が似て居ると云ふ所から屏風岩、兜岩、烏帽子岩など云ふ、俗な名を附けたり、唐様かみやうにいろくの雅名を附したりして、風景美の勝地と云へば、必らず其の幾つかのものに限られ居るかの如く思はれ、古人が詩や文章に褒めたものでなければ、絶景にあらざる如く考へられ、因襲の久しき、今日夫より以上の風景が、交通の開けた爲め、いくらでも現はれ出て居るのに、それには見向きもしない。甚しきは、古人の激賞した風景が其後種々の事故の爲めに變化して、既に美なる趣を失つて居るに拘はらず、尙ほ且つ其處に出掛けて往つて、内

心餘り美とも思はない辭に、古人の口眞似をして美也々と歎賞すると云ふ様なことを屢々耳にするのは、全く習慣に因はれて居るのである。全體好風景と云ふものは概して人に遠ざかつた所にあるものだ。更らに云へば、人の容易に到り得ぬ秘密の場所にあるものであつて、交通不便の時代には人の見ることを許さなかつたものである。夫が今日殆んど全部さらげ出された譯であるから、無名の山水で、是迄激賞されたものに比すれば、遙に美とすべきものがいくらかもある。然るに其の風景に接しても、古人の品題がないからと云うて、それを閑却するは以ての外の事である。好いものは目で判断すれば好いにきまつて居る、何時迄も天の橋立だ、松島だと云うて、風景を小區域に限るよりも、何ぞ進んで古人の嘗て見及ばない新しいヨリ以上の好風景を鑑賞せないのであるか。都會の人は今日でも遊び場を江の島として居る。此の島は都會に最も近い島である、島を見ることの出来ない都人士には昔から興味があつたものに相違ない。島はきはめて小さく、其の全部が方一甲で、陸からは橋を渡して直ぐに至ることも出来、且つ島の一端から富士が現はれ、風景を玩ぶには手頃のものである。こんな手の上にも乗る様な島を交通不便の古代には大島と呼んだこともあつたと聞いて居る。昔しの都人士がこれ

を大きく思つたのも無理はないが、いつ迄も江の島の美ばかり稱してゐる様では、日本の様に世界に冠たる程澤山にある好風景に對し誠に相濟まぬ譯合ひである。今後の旅行家は舊來の陋習に囚はれず、自分の見識で風景を鑑賞し、徒らに古人の言に泥むことを止め、別天地を開拓せねばならぬ。近江八景は名高いものになつて居るけれども、實地は夫程の美を感じぬ、紀州和歌の浦も訪ねて見れば噂ほどの處でない、兎角「コンヴェンション」に囚はれてはならぬ。

## 案内記

旅行に最も大切な者は案内記（ガイド・ブック）である。日本でも追々案内記が出来て少しは進んだが、まだ西洋のものに比すると如何にも貧弱である。昔の案内記は幼稚だと云ふかも知れんが、趣味上から見ると寧ろ今のよりも備はつて居る。自分は昔の案内記に對して聊か趣味を感じ、書肆を訪ふ毎に幾つも購ふ癖がある。つまり趣味上廢り行くのを残念に思ふ上から漫りに購ふと云ふに過ぎぬ。其の案内記の内でも最も整つて居るものは東海道筋のものである。夫は道中記と地圖とを兼ね、或は冊子體或は折本體になつてゐる。これには宿驛も大小に従つ

て記されており、繁昌の所には人家が多く畫かれ、淋れた所は人家を少なく描き、有名な宿屋や本陣などは圖になつてゐる。街道には豆人寸馬があしらつてあつて、主なる山や川や湖水や沼や池なども描かれ、某所より某所へ幾里幾丁と里程も註されてある。又土佐繪式の雲を隔て、富嶽や其他の高山を畫き、其附近の宿驛より、これより登山などと指定もしてある。又その土地の主なる社寺や名所や或は名物などが註されてゐるものもある。全くパノラマ式に出來て居るから、之れを携へて旅行すると印象的の感覺が深く染み込み、是等の圖のお蔭で永く地名を記憶し又風景を記憶することにもなる。或は是等の式の案内記を幼稚な工夫と輕蔑するものもあるかも知れぬが、實は今日西洋に於て現下最も發達した地理の教へ方は、文章を並べた地理書で讀ませるのではなく、寧ろ斯る「グラフィック」の地圖に就て、地形でも風景でも物産でも其他一切地上の物を印象的に知らしめると云ふのが今日地理の教へ方であつて、日本の教育も追々斯様な教へ方にならねば地理を活かすことが出來ぬ。昔の案内記は粗雑ながら西洋の發達した遣り口に近いと云はざるを得ない。尙ほ案内記より少しく規模の大なるものに就て云へば、各地に名所圖會トウカイと云ふものがある。是は趣味の方面から見ると如何にも能く工夫されたも

のである。これに挿んである繪畫は名人の筆に成り、能く風景を盡したもので、今日の寫眞などの遠く及ばぬ所がある。尙ほ夫に附け加へて名所舊蹟の沿革來歴を叙し、それに關聯ある詩や歌や文章までも加へて居るが、案内記は斯くありたきもので、今日の粗雜なる案内記の及ぶ所でない。兎角今後の案内記は精細に且つ趣味的に作らねばならぬ。勿論今日作る案内記は時代相應の工夫を要する。理學の進歩せる今日に於ては、理科的解説を必要に應じて附するが如きは尤も緊要である。例へば岩に就ては火山質であるとか否とか、地質其他一切の學問を應用して、學術上に知られて居る事柄は簡單ながら説明を加へると云ふが如き進歩がなければ、眞の案内記とは云はれぬ。

### 旅館不快のかずく

旅館は今到る處可なりに整頓して、一等旅館とも云ふべきものは申分のないやうに進んで來たが、二流以下になると、まだ苦情を云はねばならぬことが多々ある。曾つて旅中無聊に堪へず、手帖に苦情の數々を駢べて見たことがある。今左に之れを録す。

- 權貴の定宿なりとて鼻に掛くる
- 隣室に病人の居る
- 隣室の喧騒なる、殊に物争などの起る
- よからぬ宿に逗留する
- 寢後宿帳をつけに来る
- 物賣の矢鱈に来る
- 床の花瓶に時經たる花の挿しある
- 手を鳴らして速かに婢の來らざる
- 便所湯殿の清からざる
- 時刻早きに出發を促す
- 宿屋の料理屋を兼業せる
- 主人、用もなきに來て長咄をする
- 夜具布團の不潔なる、敷布の濕氣ある
- 權貴の客人到着せりとて俄に部屋換を喰ふ
- 夜更けて隣室に客の來る
- 己が室の前を他客の往來する
- 寢後晚く雨戸を鎖して夢を驚かす
- 立ち際に勘定の遅き
- 時節外れの物を置いて裝飾に充つる
- 朝早く起きて鹽嗽の用意調ひ居らざる
- 婢を呼ぶ毎に別人の來る
- 上草履手拭などの不潔なる
- 投宿後荷物の直ちに届かざる
- 絃歌の喧しく聞ゆる
- 主人、心にもなきお世辭を振りまく
- 庭園の掃除行届かず塵芥の散亂する



- 手洗鉢の水をかへざる
- 深更按摩などの用を聞きに来る
- 戸締不完全にして安心ならざる
- 風呂の案内の遅き
- 發程に臨み履物傘など人に取りかへられたる
- 前程を問ふも主人の不案内なる
- 居室近く下婢の屯所ありてさやめき騒ぐ聲の聞ゆる
- 茶代の厚薄により待遇を異にする
- 茶代不受を標榜する宿屋の不深切にして宿料の不廉なる
- 隣室に酒客の騒ぎ小兒の泣く
- 急ぐ場合に宿屋の氣を揉まざる
- 多く室の空き居るに窮屈なる室を當てがはれたる
- 深夜室外に夜番の柝を打つて夢を驚かす
- 長逗留に食物の千篇一律なる
- 朝、室の掃除もせず膳部を出す

○宿屋の主人無遠慮に詩歌書畫を需むる

○床の間に地方官吏田舎大盡の揮毫を嚴めしく掲げたる

○宿屋の主人の政治を談ずる

○給仕をしながら下婢の坐睡をする

○夜遅く着きて善き酒の得られざる

○馳走顔に拙き西洋料理を出す

○着の時間を報じあるに宿屋に待設けのなき

○旅に病んで宿屋の不深切なる

○室の空く迄とて假りにむさぐるしき部屋に押込められたる

○婦人客小兒客に對する設備の行届き居らざる

○常得意客の跋扈して傍若無人なる

○夜更けて警吏の視巡りに來る

○外出中己れの室が他客の用に供しある

○土地の名所なりとて社寺の參詣を強ひらる、

## 九 堀出し物

隠れたるを顯はし、埋れたるを出し、無理解の手より理解ある手に移り、閑却されたものが珍重され、包まれた或る光りが發輝される、これが堀出しであらう。堀出しの適例と云へば、

支那の甘肅省の燉煌石室から出た、書畫佛像其他の器具などであらう。これこそ事實の堀出しで、地底から出したのである。但し地底から堀出したからと云うて、必ず堀出し物に合格するとは限らぬ。

堀出し物の第一の條件は、その物に賞玩さるべき資質があらねばならぬ。燉煌は昔晋の都のあつた跡で、その邊の土砂から堀出されるものは、書畫によらず器物によらず、六朝から唐代までのもので、頗る珍重すべき資質を具してゐる。降雨の無い乾燥の地だから、埋藏物は少しも朽ちて居らぬ。事實の堀出し逸品は先づこゝらであらう。

併し趣味界に通例堀出し物と云ふのは、必ずしも人間の手に無いもの、みを云ふのではない、人手にあるものを鑑識で發見することを云ふのである、即ち比喩的に堀出しと云ふに過ぎぬ。更に委しく云へば、委棄されたり閑却されたりしてゐるものを、鑑識で逸品と見定めて之れを取上げる、それを俗に堀出し物と云うてゐる。而して堀出しと云ふの一條件として、實價より價が安くあらねばならぬ、例へば實價百圓もするものが、十圓で手に入つたと云ふので堀出しの名がつく。趣味の本體から云ふと、價が何うであらうと、逸品だに發見すれば、それ

を喜ぶべきであつて、さうしてその喜びを表するため至當の價を拂ふべきであるが、雅三俗七の世の中に於いて、こんな君子風のこととは事實行はれ兼ねる、寧ろ高かるべきものを安く求めたと云ふ所に興味を持ち、之れを誇りとして物の趣味を説くことはあとへ廻はし、先づ價の廉を吹聴するのが通例である。趣味の問題も斯うなると陋びやくしく下くだ司すばつてくるけれども、實價に遠い低價が堀出しの條件である以上は、これも已むを得まい。持主が盲目で名器を名器と知らずにいる、それを名器と知るものが手に入れるのは、實は其器の仕合せと云ふべきだ。鑑識のない持主が、名器を二束三文に手放したからと云うて、それは自業自得で氣の毒とも云へぬ。實を云へば物を活かすも殺すも人にあるのだ。物に賞玩力のない人はどんな寶器を藏しても、瓦礫を擁すると同様である。されば堀出すと堀出されるとは、其人の鑑識力の多寡優劣に依ると云はざるを得ぬ。この鑑識力にも幾段の階級がある。相當の鑑識のある人でも、或る物に對して辨別の出来ない場合もある、無落款の書畫や或る専門の知識を要するものなどがそれであつて、何にでも鑑識のある人は減多に無い。本來堀出しを手柄とするのはその鑑識を誇るのであつて、その價の廉であるのを、彼等はその鑑識に拂はるべき當然の報酬と考へてゐる

のだ、如何さま多少の道理がある。併し世間には掘出しに汲々たるものがあつて、その人は必らずしも鑑識に長じてゐない、彼等は唯だ射倖心に驅られて、萬一の僥倖を期するのである、その心事を剖析すると陋劣味が潜在してゐて面白くない。全體世の中には上には上があつて、掘出さうとして贗物をつかまされたり、掘出す爲めに物を交換に出し、却つて人に掘出されたりする例がいくらもある、皆射倖慾に熱するから起る失敗である。兎もすると無心得たものが、鑑賞家の品驚より掘出しとされる例もある。これは他力の掘出しであつて、斯様のものに對し其持主が誇る権利が有るか無いかは疑問であるが、これも一種の掘出しものに相違ない。

若し夫れ掘出さんが爲めに種々の手段を用ゐる、或は騙し或は欺き、正しからざる方便を以つて或は誘ひ或は惑はすに至つては、沙汰の限りである。かくの如きは趣味界の賊と謂はざるを得ぬ。しかるに掘出しの歴史には往々詐謀權略が伴ひ、けしからんことには、動もすると、そのよからぬ權略を公然人に語つて手段の巧を衒ふものがある。商人に在つては深く咎むべきでないが、相當の地位ある人に往々この事あるは、陋と云はざるを得ない。

掘出しもの、來歴は多くの場合趣味があり、物それ自身にも趣味を添へるものであるが、ウブ、純白、誰れに語つても恥かしからぬ掘出し物は多くあるものでない。神聖な書齋に置く書畫なり、骨董なり、それが掘出しであれば興味のあることで、吾等はそれを歓迎するけれども、願くはそれが清淨潔白なものでありたい。

## 一〇 骨董のかげ口

質屋の庫の中で、多くの器物がうち寄り、互ひに身の上を述懐するといふ趣向は、古くからあるが、器物自身をして己れの事を云はしめるほど確かなことはあるまい。人間の鑑定は、實を云へば餘り當あてにならぬ。器物は鑑定家の嘘八百を常に冷笑してゐる。無鑑識の富豪が巨費を投じて贗品を購ふのを氣の毒がつてゐる。彼等をして遠慮なくそれを言はしめるも一興ではあるまいか。私は曾つて彼等の壁訴訟を書いて見たことがある。左に録するのは則ち其一斑で、書畫の事には及んでゐないが、書畫の苦情も似たものであるから、骨董のかげ口を以つて類推し得ると思ふ。

我等は骨董である。我等は今我等の持主に内證で、我等の仲間の太平樂を並べて見る。

我等は強ち持主の好き嫌ひをする譯ではないが、凡そ我等の一番閉口するのは俗物の手に渡つた時である。俗物は元來我等を知るの明がないから、やゝもすると、稀代の名工の作の、幾百年を経て漸くついた時代のさびを、是は汚いなど、いうて無闇に磨り落す事がある。此等は恰も我等の皮膚を擦り剥くと同様で、慘酷とも何とも言ひやうがない。

よし又それ程の亂暴は働かないまでも、我等仲間をそれ／＼適處に配置してくれないため、その特色を十分に發揮し得ないことがある。例へば明代あんたいの盆あんたいに今時のものを載せたり、しぶ味が特色の器物の傍に金蒔繪のびか／＼物を取合されたりしては、我等も戸惑ひせざるを得ない。我等は金殿玉樓に入つて、こんな工合に時代違ひのものと伍したり、不調和なもの、取合せに出遇ふ位なら、寧ろ貧乏人の手に落ちても、よく其所を得て我等の特色を十分發揮させてくれる方が望ましい。然るに世の所謂成金者などになると、根が無趣味であるから、置所や取扱方などは實に頓珍漢で、それで持主は得々として居るのだから、我等の迷惑もさる事ながら、その滑稽さ加減には苦笑を禁じ得ない。

少しは骨董に眼が開いた方で、箱や袋を氣にしてくれるのは有難いが、時代の調和といふことを一向無視してゐるので、或は袋が古びたといつては新しいのに改めたり、或はつまらぬ人に箱書をされたりするにも困る。中には無頓着な持主になると、年が年中床や棚へ飾つて置かれるだけならまだしもだが、時々鑑賞に引き出されて、いざ片附けるといふ段には、いろいろなものゝ雑居させられて、各自の體がぶつかり合ふ爲め、自然負傷するやうな事も度々ある。それを何とも思つてくれないのは實に情けない。

ナマ好事家などが、いろいろと工夫して却つて折角の本體を壞るにも困る。本來料紙文庫に出来て居るものを、形が小さいからといつて中春なかはるを作つて硯箱にしたり、折角の名匠苦心の作を意匠が足らぬと言つて、あとから金銀の裝飾を加へたり、又我等仲間の皮膚にあられもない花押を漆書したり、さては獲やすからざる印材の鈕にメチャク落款を入れたりなどは、皆な打ち毀して、骨董を愛する者といふことは出来ない。全體茶の宗匠などは兎角茶器に花押を入れたがる。持主はそれを得て價を増すかのやうに思つてゐるが、實の所それだけが疵になるのを御承知ないらしい。



それから鑑定家が極めを付ける折などにも、屢々我等を失笑させる事がある、まして半可通のもの知り顔にも困る。共箱の大切なことを漸く知つてから、支那製の堆朱の香合などに柘桐の箱がついてゐるのを見て、これは共箱であると喜んだり、南蠻の銅器を購ひ得て、共箱の無いのが遺憾だなど、は寧ろ嘖飯の至りで、共箱が聞いて呆れる。

時代蒔繪などの珍器の内方が少し汚れてゐるからといつて、金などに塗りかへるのは、若干の費用を掛けて價を高くせんとの野心であらう。こんな骨董屋は幼稚なもので、素よりいふに足らぬが、偶々通客が店頭へやつて来て、これはよい時代だ、惜しい事には中を塗り直してある、これが大疵だ、若しこれがもとの儘であつたなら随分奮發すべきに、と評される時の我等仲間の嬉しさは、實に想像の外である。骨董屋の主人が茫然として、塗り換へた費用の二倍三倍位を損して、ヤツトの事に手を摺りながら買上を求めるときの面は、ふた眼と見られたものではないが、我等仲間の心地のよい事は又格別である。

眞贋のおためしに遇ふのは我慢も出来るが、時々ひどい目に逢ふ事がある。例へば交趾かうちの藥を小刀でボリ／＼削つて見たり、堆朱の一角を崩して見るやうなことが毎々ある、悲慘なこと

ではあるまいか。往々贋作が眞物と受取られて相當の待遇を受けるのも心苦しく感ずるが、それは我等仲間の責任でない。持主が贋作である事を知りながら、しかもこれはよく出来て居ると言うて珍重し、人に向つても此の意味で示す譯ならば我等も愉快に感ずるが、もしさもなくて、持主は全く眞物と思ひ込んでゐるのに、鑑識家が贋品と評して、これは箱の方が却つて價があるなどと皮肉に罵倒される時などは、持主よりも先づ我等仲間が却つて赤面する。さていよいよそれが贋品ときまると、忽ちその待遇が一變し、哀れにも袋や箱までも取除かれ、無雜作に扱はれるに至つては、人情の輕薄實に忍ぶ可からざる感とする。

人間は伶俐らしい顔はしてゐるが、案外に物がわからない。その證據には、よく我等の年齢と産地を取り違へる。まだうら若いものを捕へて、これは五百年の時代があるとか、日本産と心付かずに、支那だ、高麗かうらいだと言つてゐるのは毎度の事で、骨董屋で賣買の場合に於ける争も皆それである。妙な事には骨董屋は飽く迄我等を老齡にすれども、顧客はこれに反して成るべく青年にしようとする。産地についても同様で、日本固有のものは兎も角も、すこしく疑はしものになると、賣る方では斷じて支那だといふのに、顧客は之れを和製だといふ、實に奇觀

である。それでゐて買ふ方でも内心骨董屋と同説の事もあるに違ひないが、價を附けるためにこんな懸引をやるのであると思ふと、人間の根性の野卑なところが露はれて、我等も内々舌を吐かざるを得ない。

我等の祖先の過去帳をよく調べないで、無闇に古い物をよがる連中にも困る。兎もすると延喜の年號のある經筒きやうづつや天平年間の經瓦などを捜す人がある。我等先祖の成立しない頃のものを得ようといふのは、無理ではあるまいか。

骨董屋に訪づれる客のうちには、氣障な奴も随分あるが、たまには我等の氣に喰つた客も來る。どんなのが我等の氣に喰ふかといふと、概して眼識のある客である。此種の客は會心の品を見ると、何とも言はずに價を拂つて忽ち我等を拉し歸る。そんな客は確かに内心満足を表して居るのである。兎もすると歡喜の餘り、これは廉に過ぎる、少しばかりだが價の外に口錢を遣るといつて、若干の金を投り出して行く客もある。我等も斯様な客に持ち歸られると、その寵遇が非常であるから實に心持がよい。又價が格別に廉であるといふので、差向きその物を欲しく思はないでも、これは勿體ない、入用はないが買つて置くというて持ち歸る人もある。是

等は眞に我等仲間の眞價を認めてくれる客で、大に歓迎する所である。

我等が厭に思ふことがさまざまある中で、鑑定家などいふものが、よくも分りもしないで、負惜みにより加減のことをいふことがある、我等が内々苦笑するのも此時だ。鑑定家の内には狡猾なものがあつて、贓物でないものをコキけなして、さて後ちに手を廻はして、やすく買ひ求めてホク／＼してゐるものがある、面つらにくいテアヒだ。我等が危険に思ふのは、泥棒に凌はる、時である。兎もすると捕吏に追はれて我等を隠すに由なく、濠へ投込んだり、土中に埋めたりして、それきり世に出られない事もある、又兎もすると破壊されたりすることもある。併し豫審庭へ證據品として出されて、被告の白狀を聞くだけは多少の興がある。

兎もすると贓作ばかり澤山に藏に入れて喜んでゐる人がある。その人の庫にある間は無事だが、一旦世に出ると直ちに贓物と看破されて唾棄される、其時は宛がら死刑の宣告でも受けるやうな氣がする。之れに反して鑑識家の手にある我等の仲間は仕合せだ。贓物は一點もなく、皆な正しい血統を引いてゐるものばかりで、こんな藏者に限り、産地により時代により類を分つて整然と保存するから、宛がら親屬と一堂に會する心地がして眞に愉快を覺える。

昔しの賣立には流石に義理深い美談があつた。大阪の豪商天王寺屋五兵衛が賣立をした時、加島屋が幾千の金を投じて名器を落札し、親戚知友を會して茶會を催し、名器を得た喜びを頌つた。さて茶會が濟むと、其器を天王寺屋へ慰斗おしをつけて返上に及んだ。加島屋はもと天王寺屋のお蔭で大きくなつたのだから其恩を忘れず、斯くしたのだといふが、當節はそんな義理堅い人は見受けないヨ。

今の茶器を澤山に有つてゐる人々は、茶會の時に往々ボロを出して識者の笑を博する。我等は其都度主人のお蔭で赤面するヨ。どうも多く名器を藏してゐると、一つの病は兎角それを出して人に見せたくなる、そこで無理が起る。出し過ぎるために物の調和を失つたり、衝氣せいきがほのめいたりして、折角の茶會をメチャク〜にする。そこへ行くと、大家の茶會には少しも無理がない。幾戸いくと前茶器を藏める庫があつても、不要の物や調和を害するやうなもの一つも出さないから、指のさし處がない。

無闇に他人の愛藏品を欲しがる人にも困るネ。某侯の如きは、好んで人の名器を見て無心を言ふ癖があつた。そこで侯から拜見をと望まると、戰慄して兎皇大切なものは深く匿し、よ

い加減なものをシブく出して見せたものだ。隠された我等は主人の温情に泣かざるを得なかつた。

某大家の賣立會だ、入札會だというて騒ぎ立つのを冷靜に見てゐるのも一興だネ。仙臺侯の賣立だといふと、御家騒動や仙臺萩の劇を聯想して、妙な連中が場に入込んで来る。政岡の飯を炊いた釜はないかの、千松のお膳が無いかのと捜し廻はつて、飛んでもないものに強ひて因みをつけて、争うて入札するなどは噴飯に値する。大名の持ちものでさへあれば何でもよいものと心得て、どこにでもやすく買へるものを高々と買ふのをかしい。大名のもので、如何はしい贗物が無い譯ではない。それを藏者を過信して一向に疑はないなどは、人間といふ奴も案外甘いものである。大名によつて藏せらるゝ我等は、自然賞目がつくので、同じものでも價が高く、珍重もさるゝから、我等は仕合せであるが、さて其手を離れることになる、幸か不幸かを一考せねばならぬ。近く十數年の間に諸大名が藏拂ひをしたことは著名な事實だが、戰國時代から久しく暗にゐた我等の先輩や仲間、これにより初めて天日を拜した。其舉句、持主が變つて各所へ散じた。其持主が變つて却つて仕合せを増した者もあるが、中には頗

る危険の人の手に渡つた者もある。所謂大成金の如きは如何にも大膽に多くの價を拂ふものであるが、榮枯盛衰の最も劇しいのは此の族で、いつ何時沈淪するかも知れず、随つて我等の仲間の運命もどうなることか、考へて見れば心細い極みである。

骨董商といふものも随分慾張りであるが、しかし人間といふ奴は與し易いものである。入札會には例として札元ふたもとが同業に酒食の饗應をする。サア一杯飲むと、忽ち冷靜を破つて氣が荒くなり、競争が起つて、酒前よりも價を倍加するを辭せぬ。我等の價は、實は酒のお蔭であるのである。骨董屋は實は小膽もので、酒力を藉り勢ひをつけるが、さて僅か一萬圓の札を書く時には手がブル／＼振へるヨ。

昔から骨董を翫賞すると終には産を破ると戒めて居るが、これは我等を侮辱するの甚しいものである。凡そ何事でも程度を超えて耽れば必ず産を破るに至る、必ずしも我等骨董のみではない。畢竟是れ一を知つて他を知らぬ俗物の妄言である。骨董は其實或る場合に於ては隨分産を作ることさへある。嘗ては之れを二束三文に買つて散々樂んだ擧句に、次第に時代も古くなり、品も稀れになり、そして自分の飽きた頃になつて百倍二百倍の價を持つやうなものはい

くらもある。かうなると、株券などを有つて居るよりは遙かに利益になる。株券などは一向趣味上の快樂はないが、骨董は其の人に無限の快樂を與へ、其の上價を追々増してゆくこともあるから、之をしも一概に産を破ると云うて排斥するは、無趣味な頑固者流の僻見と言はねばならぬ。併し相當の鑑識も無いくせに濫りに骨董に巨額の金を投ずるは全くよろしくない。要するに骨董が破産の基をなすのは、無鑑識で金を投ずるからなのだ。

それにつけても我等の毎度お氣の毒に思ふのは、田舎の金持の物數寄である。彼等は眞によい物を見る機會が乏しいから、兎もすると仕込物などを滅法界の高價で買ひ込んで、これは漢器だ、これは天平器だなど、いうて誇り、財産目録には何千圓何萬圓と記して置く。そしてこれを秘藏して人にも示さず、自ら楽しんでゐるだけならまだよいが、さうなると自然人にも示して誇つて見たくなり、一步進んでは東京へ持ち出して、他人の所藏と比較がして見たい、或は一層高い價に賣つて見たいと云ふやうな心が起る。茲に到つて初めて化けの皮が剥け、何千圓何萬圓といふ財産が一夜の内に大暴落して、僅か百圓にも足らぬといふ事がある。イヤハヤ笑止千萬の事で……。



田舎に限らず都下に於ても、時によると例の鑑定家や道具屋が氣脈を通じて、權勢もあり金もあり多少の鑑識もある高貴の人々へ、随分如何はしい品を非常の高價で賣りつけることがある。買った方では固より眞物と信じてゐる、そして偶々之れを見せられる人も先方の氣を兼ねて、わるいと思つても直言を憚り、よい加減に褒めて置くからたまらない。其の持主は大得意で、生涯贗物を擁して終に覺るの機會がない。然るに一旦其の人が没落して、其の品が賣りにでも出たとなると、鑑定家や骨董家は、見ぬうちから、ウムあの人のか、あれならお話にならぬなど、舌を吐いて冷笑する位のこととは彼等仲間の往々やる所で、實に油斷も隙もならぬ話である。

女色を愛する人が、女の素姓や、爲人や、氣立や、才徳などは一向構はずに、たい／＼容色のみを標準として品定めするのを、世には「面喰ひ」といつて之れを卑下するが、骨董屋にも客人中にも、かういふ「面喰ひ」先生が随分少くない。一體汚いものよりは奇麗なものを誰れしも好くのは普通であるが、趣味は必ずしも美麗なものに特有とは限らない。わびたもの、さびのあるもの、しぶいものなどは概して奇麗とは言はれぬが、その中になかく捨て難い趣味

がある。這般の趣味は、通人にして初めてよく解する所で、所謂「面喰ひ」者流の到底窺ひ知り得べき所でない。

何といつても我等の趣味は至つて地味な方であるから、世間一般が十分に解してくれないのも無理はないが、近來我等の持主の宅へ尋ねて來る客の九分九厘まで、我等仲間が書齋や座敷の床などに立派に飾られてあるのを見ても一向冷淡で、中には我等に一瞥をすら與へない人がある。こんな客計りに來られては、主人の失望もさる事ながら、我等も盲學校の置物となつてゐると同様で、實に馬鹿々々しい氣持がする。我等の眼から見ると、こんな連中は誠に可哀相なものだ、例へば花の山に入つて花を賞つることを知らぬ人達と言はねばならぬ。

畢竟するに、我等仲間の恩人は茶人若しくは其の流れを汲む好事家である。人情として誰れしも物の破損を忌み、美なるを好むのが常であるのに、茶人は雅趣さへあれば、多少の破損は厭はぬ。きらびやかなものは寧ろ之れを避けてさびのあるものをば珍重する。土中に埋れてゐた磁器などの掘出され、幾百年の間墳墓の枯骨に殉して、殆んど世に出る機會がなさうな運命を擔つてゐた品が、再び世に出るのも皆茶人達のお蔭である。茶人のためには、その昔晝所

にござろくして亂雜に取扱はれたつまらぬ器物も、年を経て其の類が絶えてなくなると、やがて貴重品に列せられる。極端な例を言ふと、始め不淨のものを入れた器が、誤つて食器などに採用されるといふ滑稽もある。近年焼芋屋は、甘藷先生を恩人として其の碑を建てたが、骨董屋なども、其の掣に倣うて宜しく茶人のために碑を建ててゐるがよからうと思ふ。